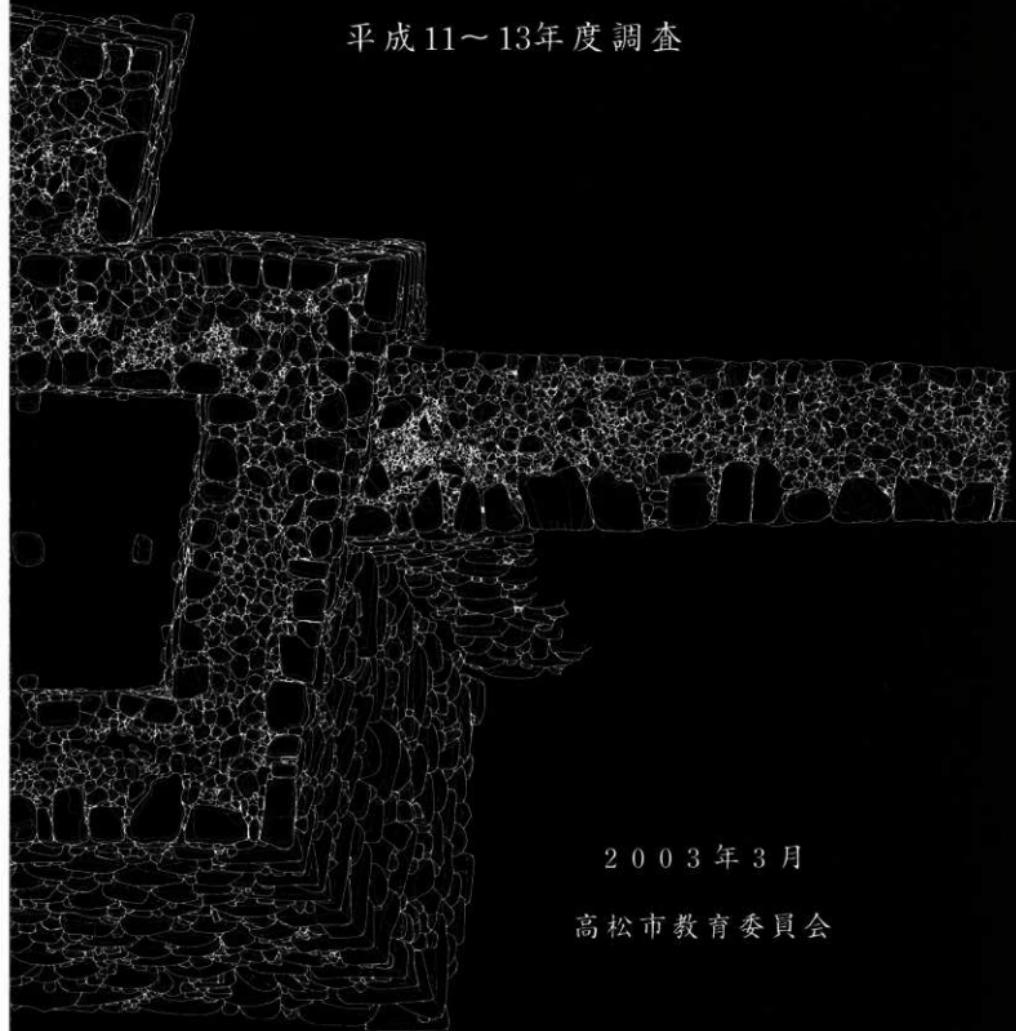


# 史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報

平成11～13年度調査



2003年3月

高松市教育委員会

# 例　　言

- 1 本報告書は、高松市が実施している史跡高松城跡地久櫓台石垣保存整備事業に伴うもので、高松市玉藻町に所在する史跡高松城跡地久櫓台の平成11～13年度の調査概要報告を収録した。
- 2 発掘調査および整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
- 3 調査から概報作成に至るまで、下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)

香川県教育委員会　香川県歴史博物館　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

讃岐文化遺産研究会

東　信男(丸亀市教育委員会)　織野　英史(瀬戸内海歴史民俗資料館)

川村　教一(高松高等学校教諭)　北垣聰一郎(樅原考古学研究所研究員)

日下　正剛(鳴門市立鳴門工業学校)　工藤　茂博(姫路市立城郭研究室)

佐藤　亜星(元興寺文化財研究所)

佐藤　竜馬、松本和彦、陶山仁美(財団法人香川県埋蔵文化財調査センター)

中井　均(米原町教育委員会)　宮武　正登(名護屋博物館学芸員)

- 4 調査は、平成11～13年度に文化振興課文化財専門員川畠聰が実施し、平成12年度の後半を同文化財専門員大嶋和則が行った。平成11・13年度の調査に際しては、大朝利和がこれを補佐した。整理作業は川畠統括のもと、片桐節子が実施した。
- 5 本概報掲載の写真撮影は、西大寺フォト杉本和樹氏の協力を得た。
- 6 本概報の編集・執筆は、川畠が行った。
- 7 本文の挿図として、高松市都市計画図1万分の1「中心部」を一部改変して使用した。
- 8 発掘調査で得られたすべての資料は、高松市教育委員会で保管している。
- 9 本概報の高度値は海拔高を表し、方位は座標北を表す。国土座標数値は、平成11年度のものを使用している。

# 目　　次

例言・目次	1
第1章　調査の経緯と経過	
第1節　調査の経緯	2
第2節　調査の経過	2
第2章　地理的環境・歴史的環境	
第1節　地理的環境	3
第2節　歴史的環境	3
第3章　調査の成果	
第1節　地久櫓台の概要と基本層序	6
第2節　地久櫓台の造構と遺物	23
第3節　本丸西土壙台と遺物	39
第4節　本丸南土壙台と遺物	39
第5節　本丸の造構と遺物	42
第4章　まとめ	
第1節　地久櫓台の変遷	45
第2節　地下室(穴藏)について	45

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

史跡高松城跡地久櫓台は、本丸南西の隅に位置し、江戸時代には本丸は内堀によって閉まれていた。昭和23年(1948)に本丸西側の内堀は埋め立てられ、その後高松琴平電気鉄道の築港駅と線路が敷設された。このため、地久櫓台はこの線路と接するようになったが、その後、櫓台のあちこちに孕みや石材の割れが顕著となり、線路への落石の危険が懸念された。このため、高松城跡を管理する高松市では、平成10年度より国庫補助事業として地久櫓台の解体および復元を実施しており、これを受けた高松市教育委員会は平成11年度の解体時より必要な発掘調査を行っている。

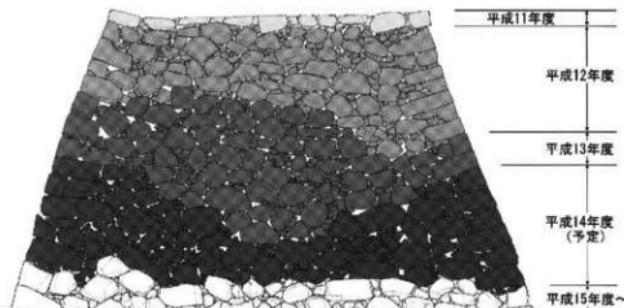
## 第2節 調査の経過

平成10年度の櫓台解体は、櫓台西面すなわち鉄道線路側において、石垣崩落防止用ネットを張る作業のみであった。このネットの支柱用アンカーを設置するため、櫓台北隣接地において一部掘削を行ったが、この地点はすでに前年度に調査を終了していた。

平成11年度の櫓台解体は石垣最上段のみであることから、発掘調査も櫓台上面の遺構検出にとどめた。その結果、時期不明の礎石列と地下式構造物を想定させる石積が確認された。

平成12年度では、櫓台上部つまり約1/3を解体することから、前年度に想定された地下式構造物の検出を主目的に発掘調査を実施した。その結果、櫓台上部において一辺約5m四方の平面四角形で深さ約2mを測る地下室(穴蔵)を検出した。この地下室は、四壁が石垣で、床は礎石を十字に配した土間となっており、造り付けの階段は認められることから梯子等によって昇降していたと想定される。地下室の調査終了後は、櫓台解体時の立会調査に切り替え、櫓台内部の構造解明に努めた。また、櫓台北東隣接地すなわち本丸平坦地においてトレンチ調査を実施し、時期不明の礎石・石列を検出した。これは、翌年度以降の櫓台解体に伴い本丸平坦地の一部も削平されることから、事前に遺構の状況を確認することを目的としている。

平成13年度の櫓台解体は、櫓台中程を対象として規模は全体の約1/3である。櫓台北東辺では根石にまで解体が達することから、発掘調査はこれら根石の検出を目的として実施した。その結果、根石は地面に直接据え付けていることが判明した。その後は、櫓台解体時の立会調査に切り替え、櫓台内部の土層堆積状況を確認した。



第1図 地久櫓台解体整備事業計画図(平成14年度初頭段階、櫓台南面)

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。また、この平野は、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて、高松城の城下町として発展した高松市街地は、香東川の東流路が瀬戸内海に注ぐ河口中洲や砂堆上に立地している。このため、城下町は高松城跡城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は、現在、石浦尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが、17世紀前葉、高松藩に招かれた西島八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお、17世紀の庵川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

### 第2節 歴史的環境

高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは、弥生時代後期である。高松城内南の武家屋敷跡で行われた発掘調査（新ヨンデンビル別館）では、ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し、付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では、平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

この地域の土地が安定し、人が恒常に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時、この地域は窓原郷と呼ばれ、安楽寺院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は、白河院の勅使田が応徳年間頃（11世紀末葉）に立券されたものである。康治2年（1143）8月19日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから、土地が安定し条里地割または單里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。

さらに時代が下ると、莊園としての機能以外にも、文安2年（1445）の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから、中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが、高松城跡西の丸地区の発掘調査では、11世紀後半～13世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。さらに、西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では、白磁四耳壺を埋納していた13世紀後半から14世紀前半の集落跡が確認されている。

一方、高松城跡東の丸地区に目を転じると、16世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては、15～16世紀に属するS字形の大溝を検出しており、これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

このように、高松市街地下において、古代末から中世の集落等が確認され、文献からも伺えるように、かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は、博多や草戸千軒遺跡にも見られるように全国的な傾向であり、これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに、高松城がこの地に築かれ、城下町が整備されたと考えられる。



第2図 遺跡位置図

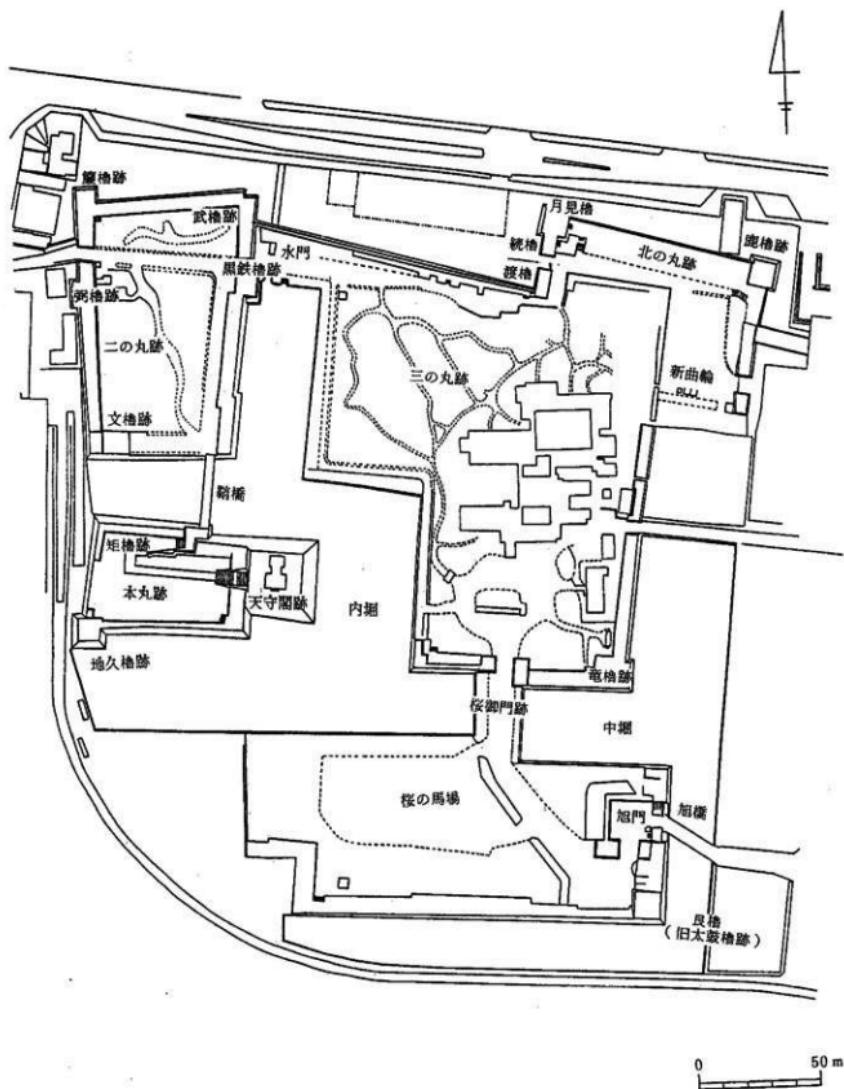
さて、この高松城および城下町を造ったのが、豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の四国征伐により、天正 13 年(1585)長宗我部元親が降伏し、讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正 15 年(1587)生駒親正が入封し、讃岐 17 万石を領した。高松城は、生駒親正の居城として、翌天正 16 年から築城され、数カ年を要して完成された水城である。水城と呼ばれる由縁は、北の守りを瀬戸内海にゆだねるだけでなく、堀には海水が導かれているからである。また、南方には大手(旧太鼓門)を構え、城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は、内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし、内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は、さらに堀によって他の曲輪と独立しており、本丸と二ノ丸をつなぐ橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。本丸には、天守閣と地久櫓が設けられており、今回の発掘調査対象となつたのが小天守の役割を担っていたと考えられる地久櫓の櫓台である。

寛永 17 年(1640)御家騒動により生駒氏は出羽国矢島に転封となり、寛永 19 年に代わって松平頼重が高松城主となり、東讃岐 12 万石を領した。松平頼重は、城の改修を度々行っているが、寛文 11 年(1671)頃の大規模な改修では、東ノ丸を造成するとともに、月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り、北に設けた水手御門より直接海へ出入りができるようになっている。その後、松平氏は高松城主として明治維新を迎える。一方、高松城は昭和 29 年(1954)に松平氏より高松市に譲渡され、翌年玉藻公園として市民に開放されるとともに、史跡として国指定され文化財の保護が図られている。しかしながら、明治 17 年(1884)に天守閣が取り壊されるとともに、都市化の波によりしだいに堀は埋め立てられ、本丸近くまで市街化が進んでいる。これを受けて、平成 8 年の史跡高松城跡保存整備基本計画作成により、高松市では城の復元に取り組んでおり、地久櫓台石垣保存整備もこの一環である。



- |                     |                    |                |                    |
|---------------------|--------------------|----------------|--------------------|
| 1 高松城跡地久櫓台          | 2 高松城跡三ノ丸石垣        | 3 高松城跡水手御門     | 4 高松城跡三ノ丸（他目的トイレ）  |
| 5 高松城跡作事丸           | 6 高松城跡（旧）艮櫓台突堤     |                | 7 高松城跡東ノ丸（県民ホール）   |
| 8 高松城跡東ノ丸（県歴史博物館）   |                    | 9 片原町遺跡        | 10 高松城跡（新ヨンデンビル別館） |
| 11 高松城跡（弁護士会会館）     |                    | 12 高松城跡（家庭裁判所） | 13 葵屋町遺跡           |
| 14 高松城跡（P T A 会館）   | 15 高松城跡西ノ丸（高松北警察署） |                |                    |
| 16 高松城跡西ノ丸（サンポート高松） | 17 高松城跡中堀（高松駅南線）   |                |                    |
|                     |                    |                | 18 浜ノ町遺跡           |

第 3 図 高松城跡周辺主要調査地位図 (縮尺 1/10,000)



第4図 史跡高松城跡平面図（縮尺 1/2,000）

## 第3章 調査の成果

### 第1節 地久櫓台の概要と基本層序

地久櫓は、本丸南西の隅にて城を堅守するために築かれたものである。天守閣は本丸東を占め、他に大きな櫓が本丸にないことから、地久櫓は小天守的役割を担っていた重要な櫓と考えられる。

地久櫓は、明治 17 年の天守閣取り壊しと前後して同じ運命を辿ったと考えられ、現在は櫓台のみが残っている。櫓台は、第 7 図のとおり、上面が南北約 9.0 m × 東西約 9.0 ~ 10.5 m を測る四角形である。つまり、南辺が約 9.0 m に対し北辺が約 10.5 m と長く、本丸側である北東隅が突き出た四角形となっている。下面是内堀に接する南辺と西辺が  $14.0 \times 14.0\text{m}$  以上の正方形、高さ 8.5m 以上の規模をもつ。櫓台東面に本丸南土堀台が、北面に本丸西土堀台が取り付いている。南土堀台は、幅 2.4 ~ 2.8m で、外側石垣高さは約 7.8m 以上、内側石垣の高さは約 2.2m である。南土堀台の幅は、櫓台取り付き部分がもっとも広く、櫓台から離れるに従い狭くなっている。西土堀台は、幅 2.6m で、外側石垣の高さは約 6.0m 以上、内側石垣の高さは約 2.2m である。西土堀台の外側石垣高さが、櫓台や南土堀台より低いのは、下部が埋められているからである。櫓台南側には今でも内堀が水をたたえているが、西側は埋められてしまい往時の姿をとどめていない。

この地久櫓を含む高松城の往時の姿は、初代高松藩主松平頼重の時に描かれた「高松城下図屏風」(第 5 図)などによって知ることができる。天守閣は南竜風の外観 3 層内部 5 層の建物であり、地久櫓は黒壁で瓦葺きの 2 層の建物として描かれている。本丸を囲んで板葺きと考えられる土塀がめぐり、本丸内には平屋の建物を見ることができる。

#### 【調査の方法】

発掘調査前は、中央がやや盛り上がった状態であった。十字に土層観察用鞋畔をのこして掘削を開始した。次に地下室埋土を掘削するにあたり、十字の上層観察用鞋畔を躊躇した上で、平面を 4 等分し、1/4 ずつ地下空床まで掘削した。これ以後は石垣を解体しなければ調査が不可能であることから、櫓台解体に伴う立会調査に切り替えた。立会調査では、櫓台の南北断面土層図を作成することに主眼をおき、石垣グリ石層や各上層から出土する土器を取り上げた。また、石垣の石材や刻印についても併行して調査した。

#### 【櫓台の基本層序】

地久櫓台に本丸西土堀台を含めた南北方向の断面は、第 6 図のとおりである。まだ解体途中であり、櫓台の上半分ほどしかないが、現時点で約 50 層に分層が可能である。これらを大きく分けると、次の 7 区分となる。

##### 《第 1・2 層》

第 1 層は擾乱、第 2 層も昭和 26 年銘の 5 円玉が出土しており、昭和 26 年以降である。第 1・2 層を除去すると櫓台中央が四辺の石垣に比べ約 60cm 窪んだ状態となり、第 2 層が黒褐色シルト質極細砂であることから、降雨時など一時的に水が溜まっていたと考えられる。

##### 《第 3・4 層》

櫓台上面にあった礎石群を置いていた土層である。第 3・4 層に色調・土質の違いはないが、第 4 層に漆喰が多く含まれており、地盤を安定させるためと考えられる。第 3 層の一部が礎石上面を覆っていたことから、もともと礎石が第 3 層中に埋まる形であったか、建物の重量で礎石が第 3 層中に沈み、礎石が使用されなくなった後に風化した第 3 层の一部が礎石を覆った可能性がある。第 3・4 層は、櫓台中央に向かって窪んで堆積している。

##### 《第 5~10 層》

櫓台中央にあった地下室の埋土である。地下室中央に向かって窪んで堆積している。第 7 層最下部

には、庵治石破片の礫層があり、第9・10層直上には1.5m四方の石組があり、この石組を第7層が覆っている。

#### 《櫓台北面石垣と地下室北石垣の間のグリ石層》

櫓台石垣と地下室石垣の間を埋めている土層はa～k層が基本であるが、櫓台北東部分のみグリ石を充填していた。第2節で報告するところ、a～k層は17世紀の遺物が出土しており古い時期のものだが、このグリ石層は瓦片を多く含むなどa～k層より新しい様相を呈している。第7図の平面図でも看取できるように、櫓台北東部分は他の部分と違って細かい石を使用している。

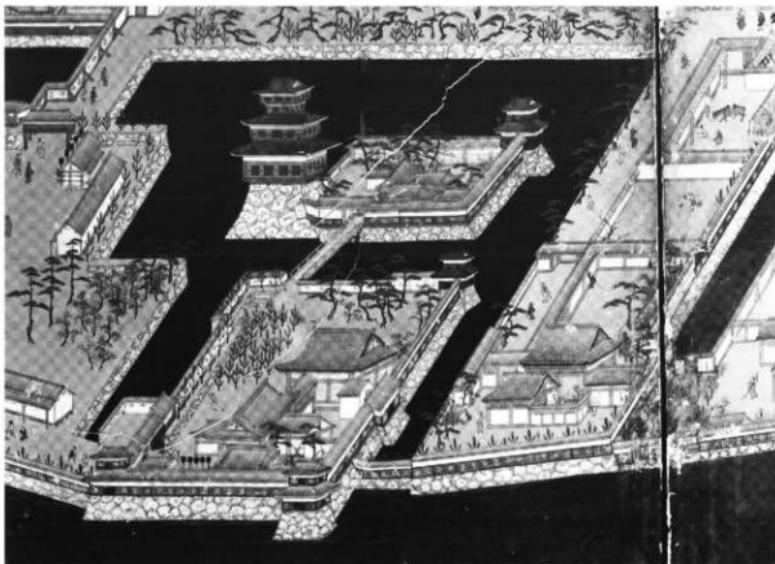
《⑥～⑦層》 地久櫓台から本丸西土堀台にかけて見られる土層である。櫓台から土堀台に向かって傾斜しており、これは第11～37層と同じ様相を示す。シルト質極細砂をブロック状に含む細砂を主体としている。この土層の上に先ほどの櫓台北面石垣と地下室北石垣の間のグリ石層や西土堀台のグリ石層がのっている。

#### 《a～k層》

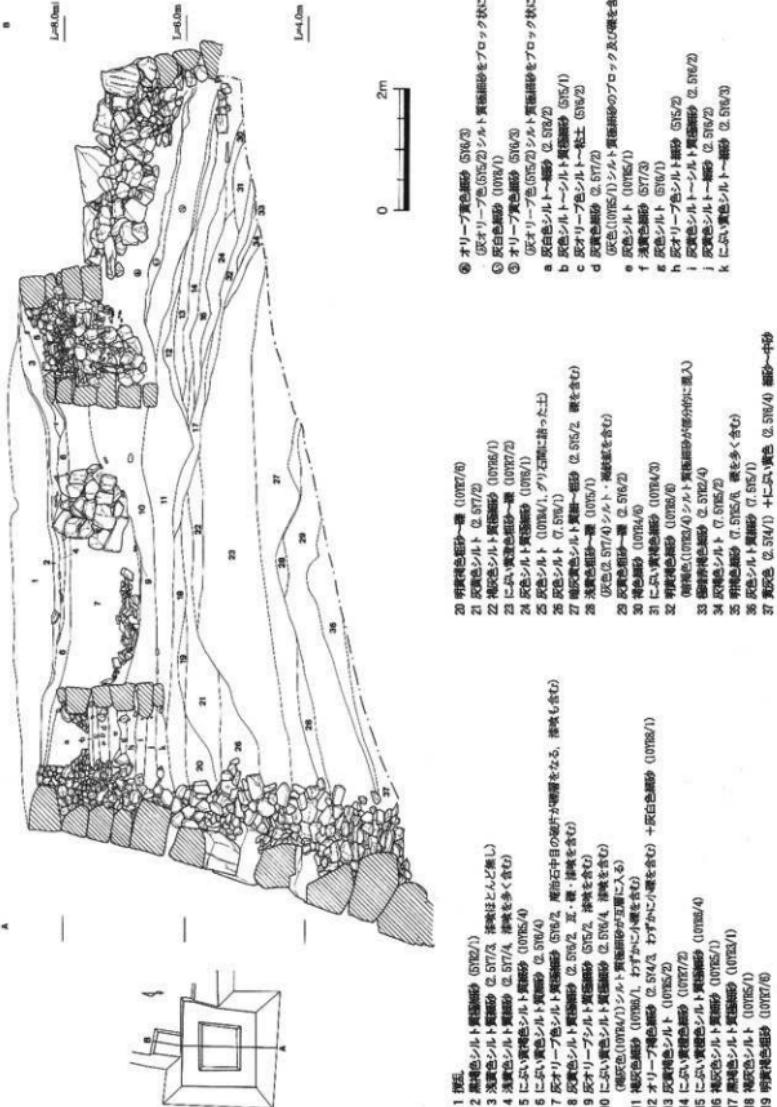
櫓台石垣と地下室石垣の間を埋めている土層である。水平に堆積している。それぞれの土層の厚さが薄く、シルトと細砂の互層であることから、櫓台石垣と地下室石垣の間という狭い空間で、両方の石垣の強度をもたすためにされた工夫と考えられる。

#### 《第11～37層》

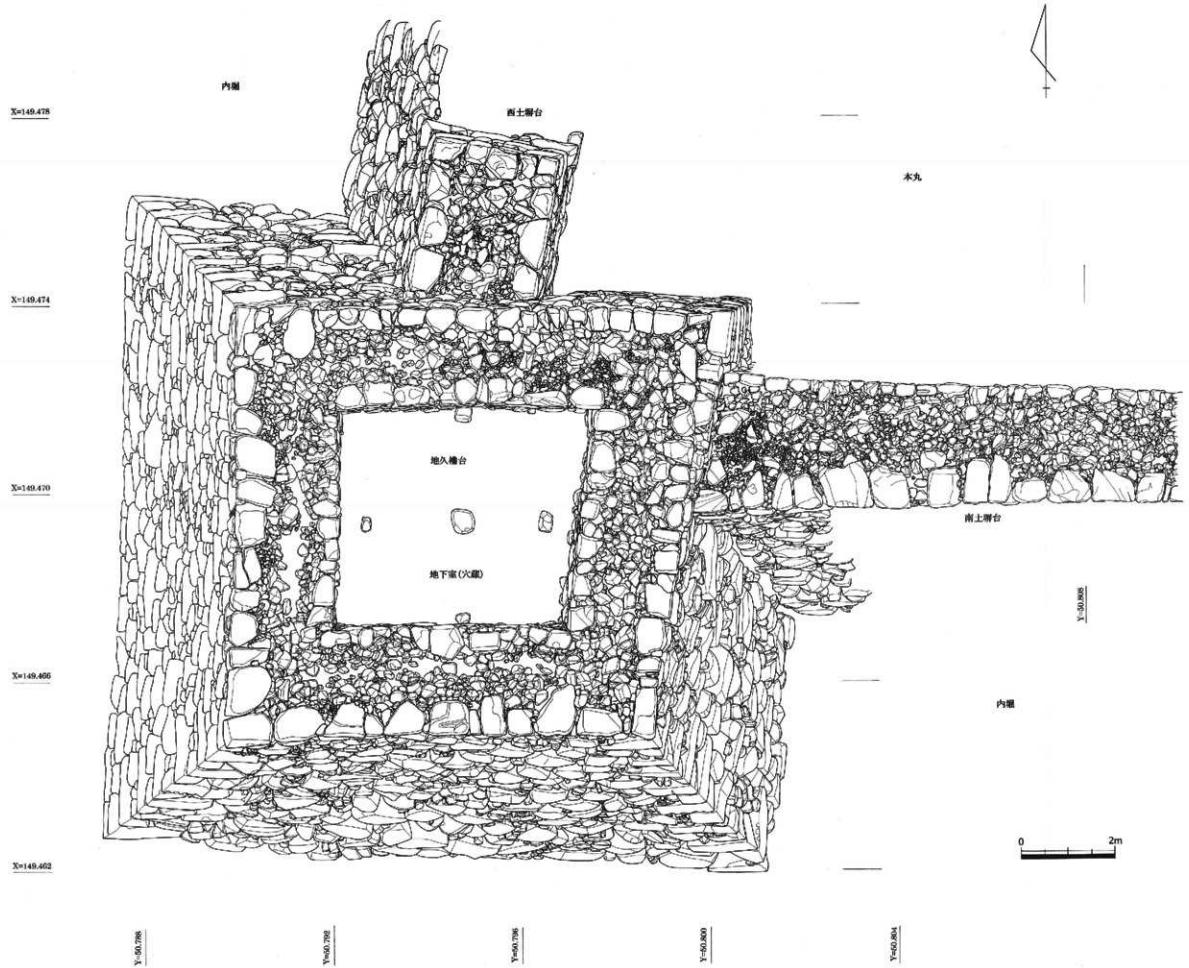
櫓台中位で主体をなす土層である。櫓台中央が一番盛り上がり、周囲に向かって緩やかに傾斜する堆積である。使用されている土は、細砂がほとんどである。この細砂は中世土器小片を含むが、これは高松城築城以前にあった中世集落に伴うものと考えられる。第11層は地下室の床面であり、地下室の石垣はこの第11層の上にのっている。



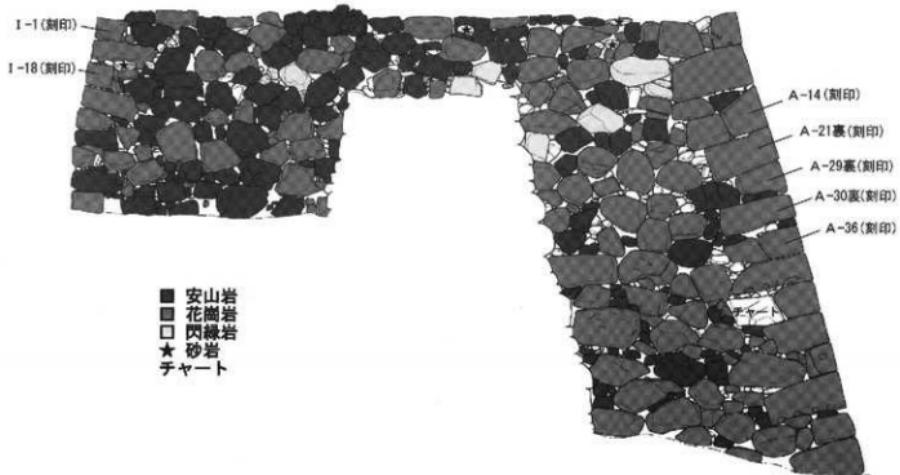
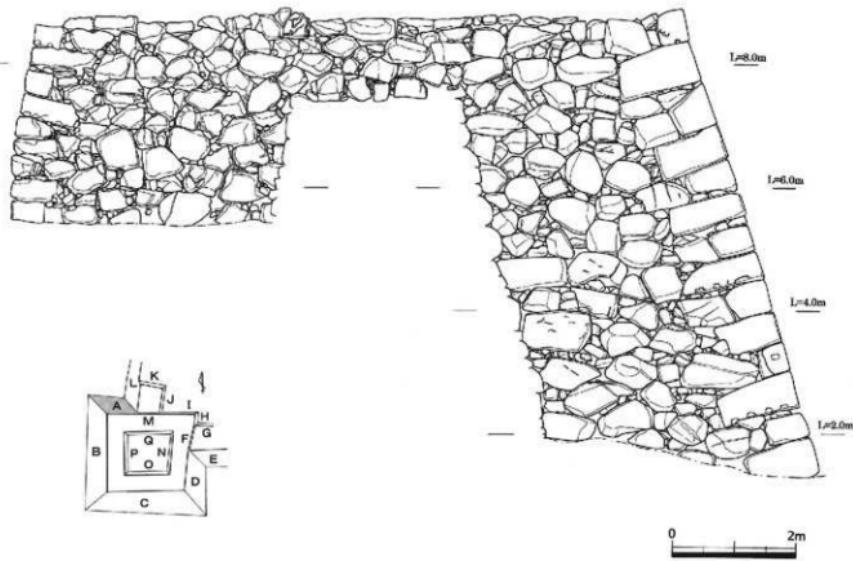
第5図 高松城下図屏風（香川県歴史博物館所蔵。北からの鳥瞰図）



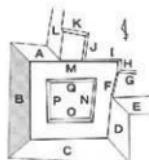
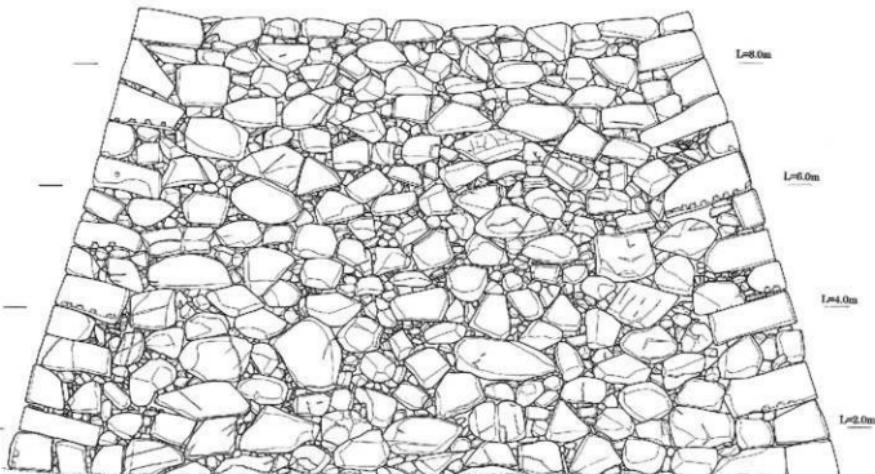
第6図 地久橋台および本丸西土解台南北断面図 (縮尺1/80)



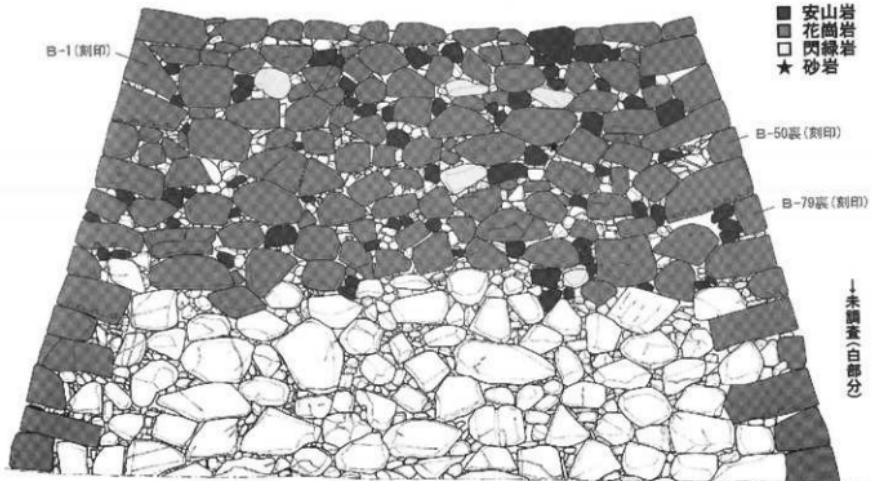
第7図 地久櫓台および本丸西土櫻台・南上櫻台平面図（縮尺1/80）



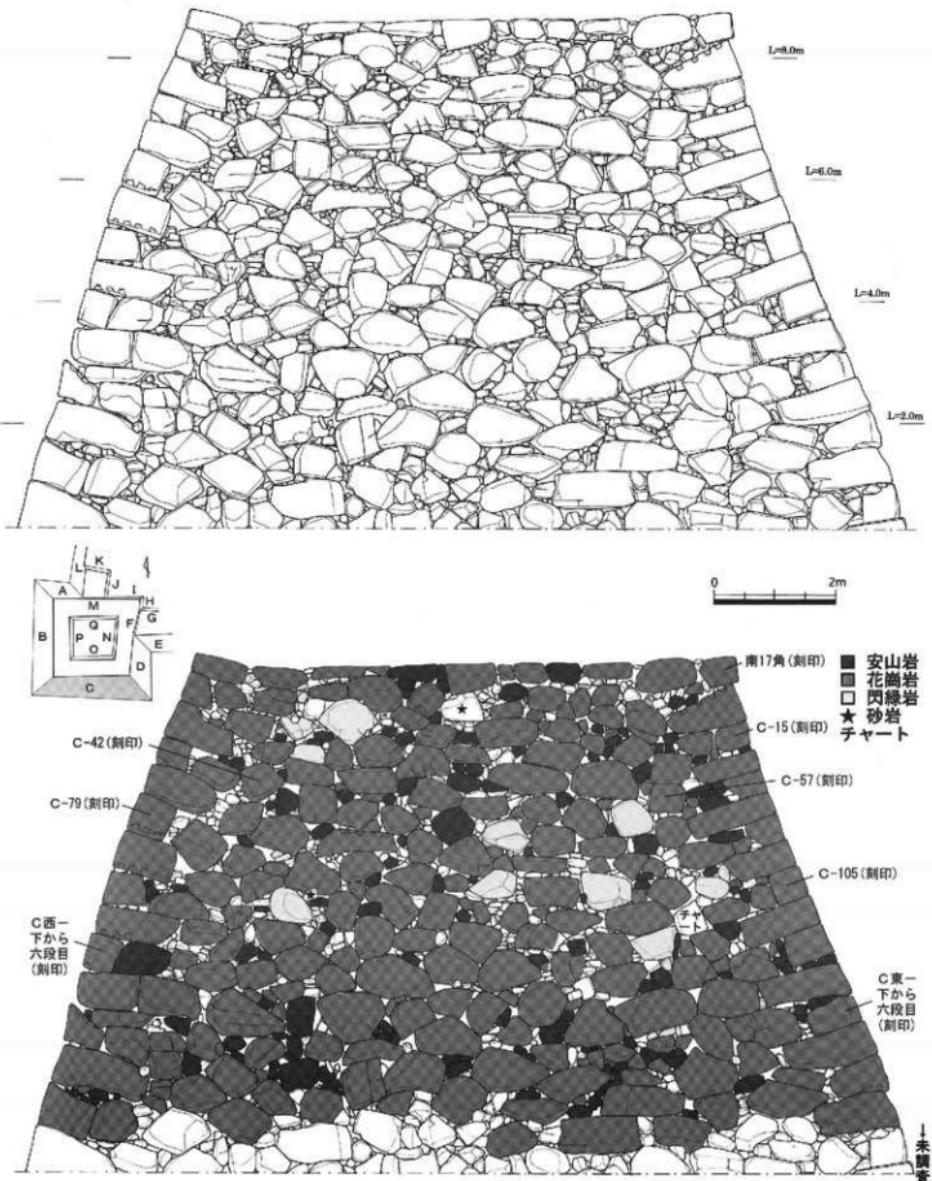
第8図 地久橋台北面（A・M・I面）立面図（縮尺1/80）



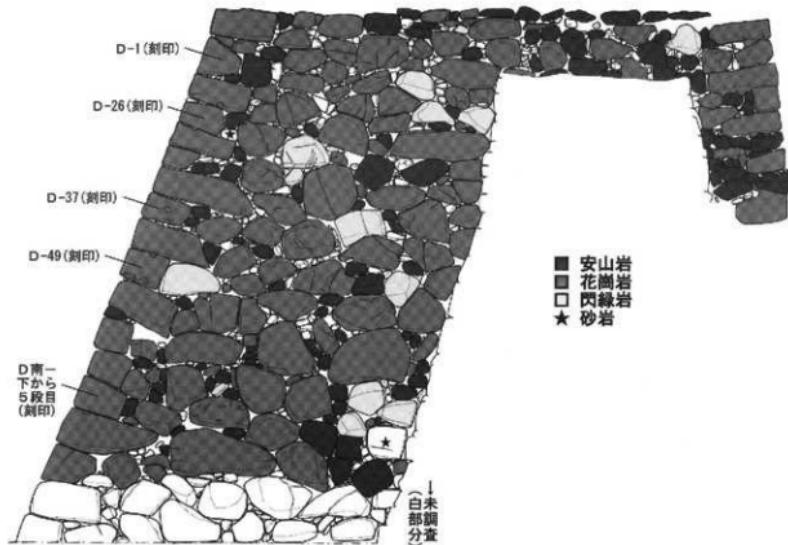
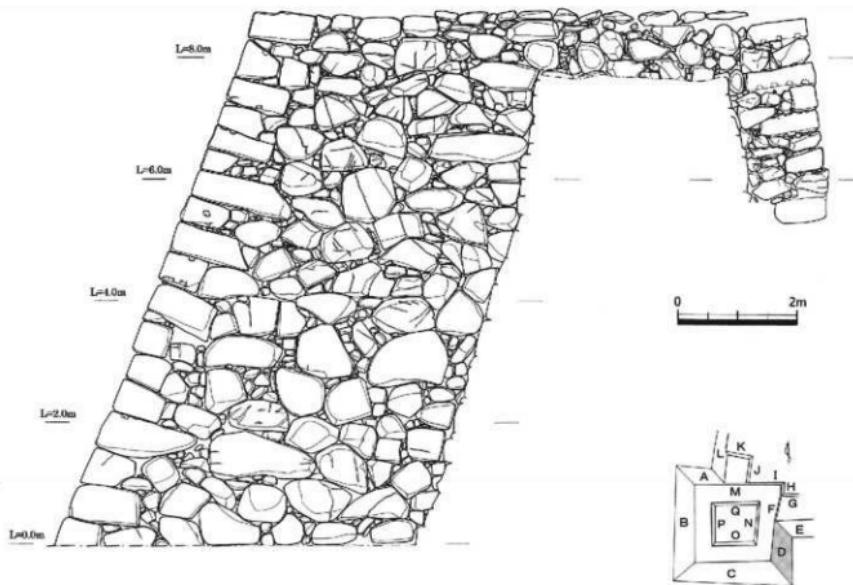
0 2m



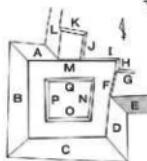
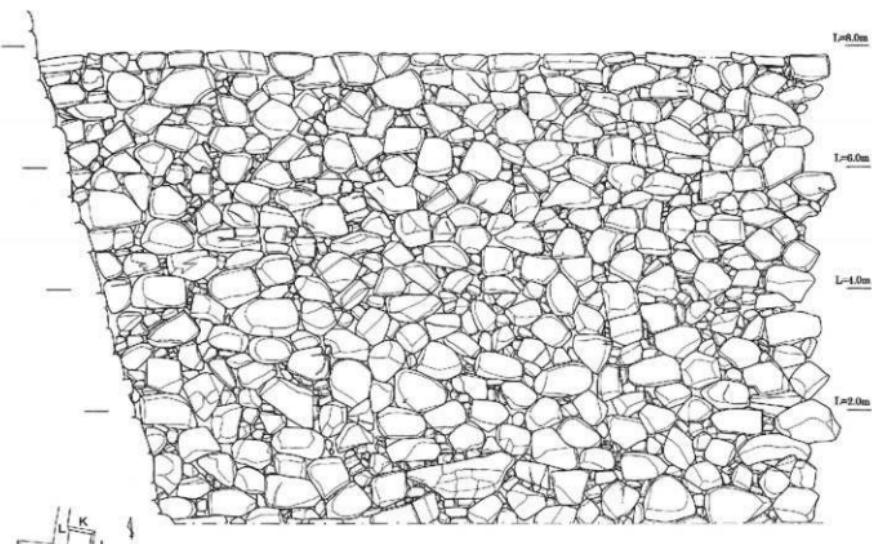
第9図 地久橋台西面（B面）立面図（縮尺1/80）



第10図 地久橹台南面（C面）立面図（縮尺1/80）

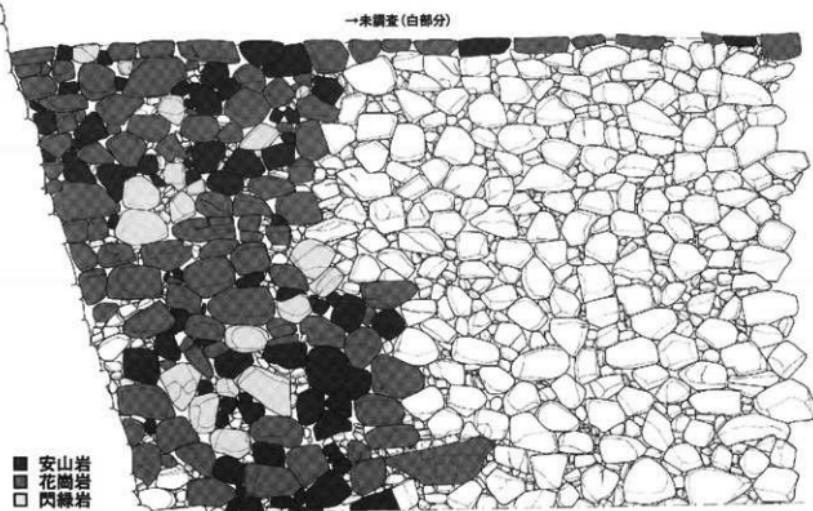


第11図 地久橋台東面(D・F・H面)立面図(縮尺1/80)

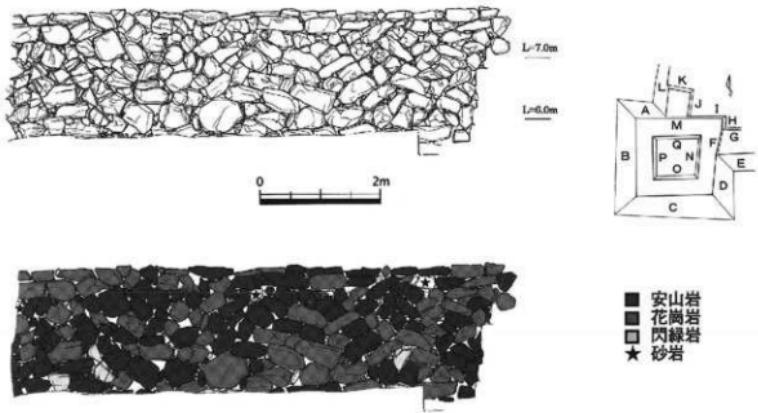


0 2m

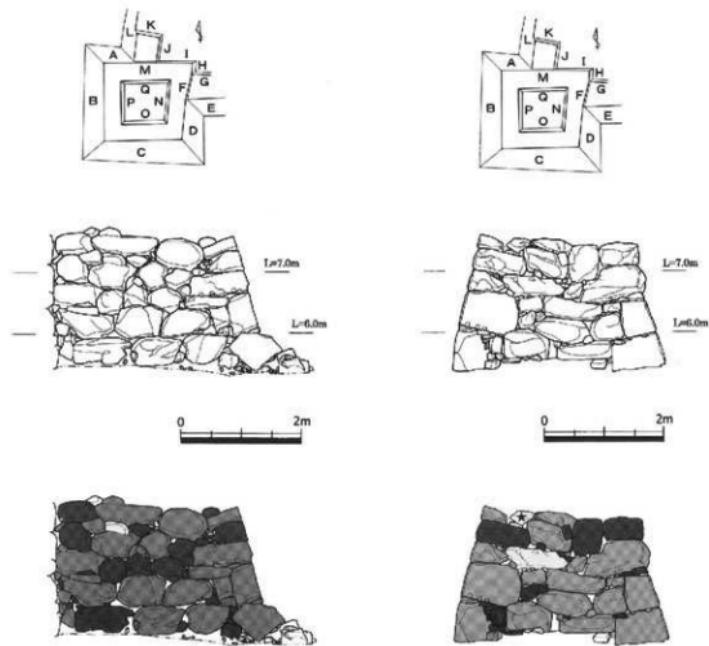
→未調査(白部分)



第12図 南土壠台南面(E面)立面図(縮尺1/80)

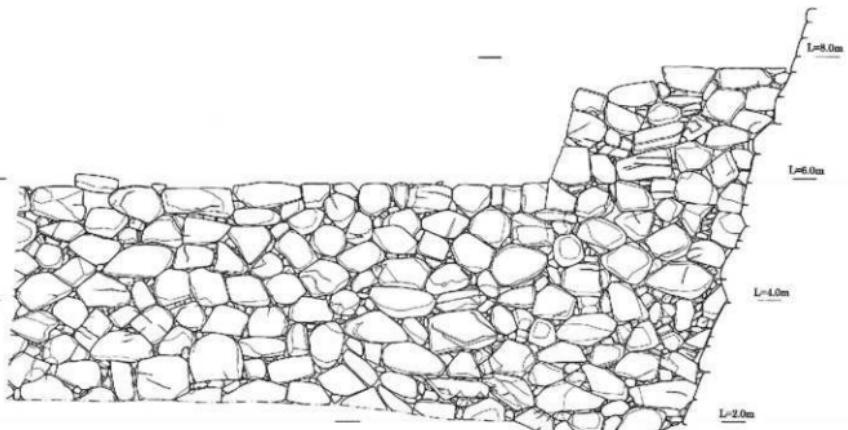


第13図 南土壠台北面（G面）立面図（縮尺1/80）

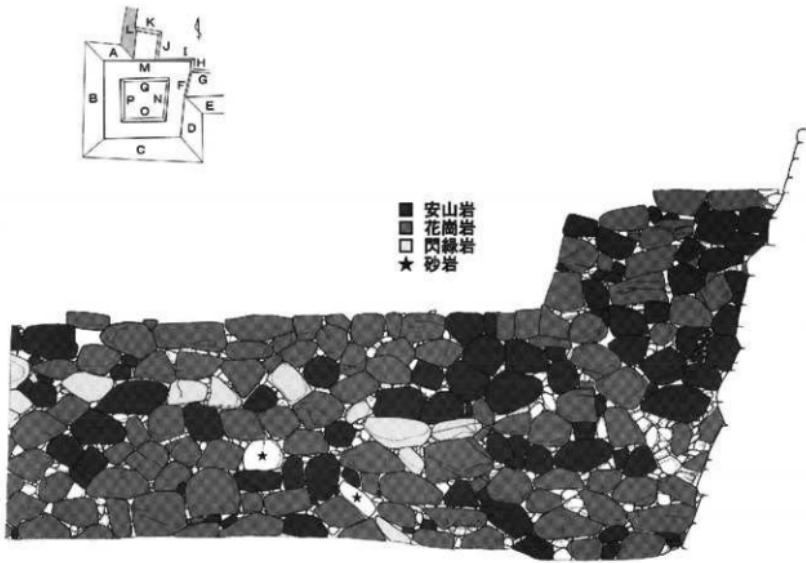


第14図 西土壠台東面（J面）立面図（縮尺1/80）

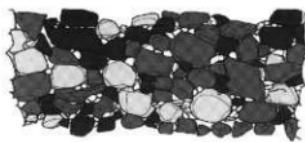
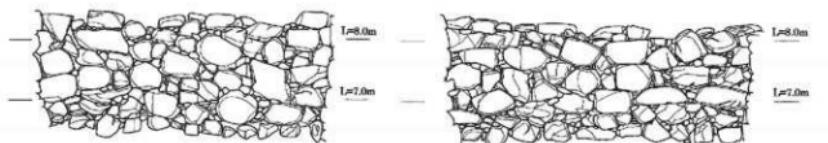
第15図 西土壠台北面（K面）立面図（縮尺1/80）



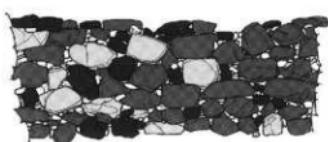
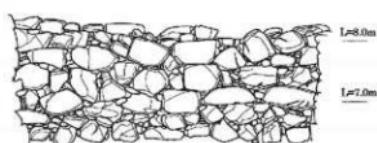
0 2m



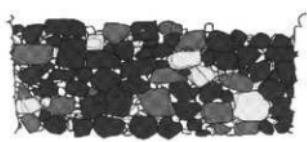
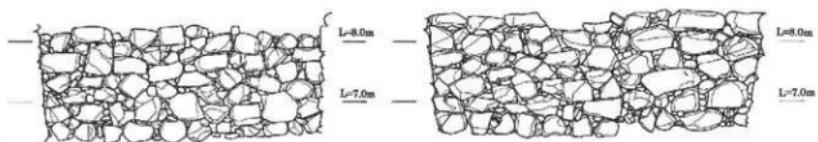
第16図 西土壠台南面（L面）立面図（縮尺1/80）



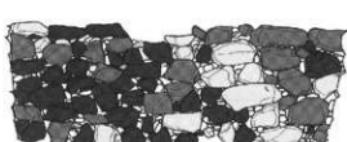
東壁（N面）



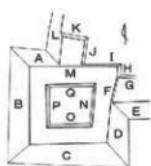
南壁（O面）



西壁（P面）



北壁（Q面）



■ 安山岩  
■ 花崗岩  
■ 開綠岩

0 2m

第17図 檜台地下室壁面（N・O・P・Q面）立面図（縮尺1/80）

### 【石垣の石材】

石垣に使用されている石材は、第1表のとおりである。総体的には、花崗岩と安山岩が82%以上を占め（不明分を除けば94%以上）、花崗岩が安山岩をやや上回る。一般的には加工しやすい花崗岩を石垣石材として多用するが、地久橋台および本丸土壠台における安山岩の多用は、比較的安山岩が入手しやすい高松ならではの現象と考えられる。安山岩は摩滅しているものが見られ、川や海岸より入手した可能性がある。実際、海の貝が付着した痕跡が認められ、普段海水と接しない地下室の石垣にも海の貝が付着している。堀にあった石垣の石を再利用した可能性も否定できないが、高松近辺の海岸では安山岩・花崗岩の塊石を今でも見られることから、近くの海岸から高松城に運び込んだ可能性がある（註1）。

註1 川村教一氏の教示による

### 地久橋台石垣石材表

	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
A・M・I面	143	171	8	1	1	0	324	44.1%	52.8%	2.5%	0.3%	0.3%	0.0%
B面	138	77	4	0	0	97	316	43.7%	24.4%	1.3%	0.0%	0.0%	30.7%
C面	230	151	13	1	1	43	439	52.4%	34.4%	3.0%	0.2%	0.2%	9.8%
D・F・H面	128	110	13	1	0	16	268	47.8%	41.0%	4.9%	0.4%	0.0%	6.0%
合 計	639	509	38	3	2	156	1,347	47.4%	37.8%	2.8%	0.2%	0.1%	11.6%

### 南土壠台石垣石材表

	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
E面	98	79	19	0	0	172	368	26.6%	21.5%	5.2%	0.0%	0.0%	46.7%
G面	84	131	4	3	0	0	222	37.8%	59.0%	1.8%	1.4%	0.0%	0.0%
合 計	182	210	23	3	0	172	590	30.8%	35.6%	3.9%	0.5%	0.0%	29.2%

### 西土壠台石垣石材表

	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
J面	30	29	1	0	0	0	60	50.0%	48.3%	1.7%	0.0%	0.0%	0.0%
K面	22	24	1	1	0	0	48	45.8%	50.0%	2.1%	2.1%	0.0%	0.0%
L面	114	98	12	2	0	0	226	50.4%	43.4%	5.3%	0.9%	0.0%	0.0%
合 計	166	151	14	3	0	0	334	49.7%	45.2%	4.2%	0.9%	0.0%	0.0%

### 地久橋台地下室石垣石材表

	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
N面	36	33	12	0	0	0	81	44.4%	40.7%	14.8%	0.0%	0.0%	0.0%
O面	42	25	9	0	0	0	76	55.3%	32.9%	11.8%	0.0%	0.0%	0.0%
P面	14	59	6	0	0	0	79	17.7%	74.7%	7.6%	0.0%	0.0%	0.0%
Q面	23	39	15	0	0	0	77	29.9%	50.6%	19.5%	0.0%	0.0%	0.0%
合 計	115	156	42	0	0	0	313	36.7%	49.8%	13.4%	0.0%	0.0%	0.0%

	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明	合 計	花崗岩	安山岩	閃緑岩	砂 岩	チャート	不 明
総合計	1,102	1,026	117	9	2	328	2,584	42.6%	39.7%	4.5%	0.3%	0.1%	12.7%

第1表 地久橋台および南・西土壠台石垣石材一覧表

### 【石垣の刻印】

地久櫓台石垣に見られる刻印は、平成13年度調査段階で第2表のとおり23石・25カ所である。刻印石の石材はすべて花崗岩であるが、これは刻印を施すのに花崗岩がもっとも適しているためである。また、櫓台における刻印石の位置は、隅石が23石中21石と約9割を占める。これは、隅石はすべて花崗岩で、なおかつ隅石に使っている花崗岩は丁寧に直方体に加工されたもので刻印を施されやすい条件にあったとも考えられるが、櫓台の隅石にこれだけ集中していることは何らかの意図が考えられる。廃除けの可能性を指摘する意見もある（織野2001）。

刻印の種類は、「上」がもっとも多く、次いで「□」、分銅形、「⊗」、「○×」と続く。「ちり」と読めるものもある。

### 参考文献

織野英史 2001 「高松城石垣の廃除け呪形」『歴史民俗協会紀要』高松市歴史民俗協会

石番号	位置	刻印1	刻印2	備考	隅石の別番号
A-14	隅石	□		長方形	B-30
A-21裏	隅石	上			B-68裏
A-29裏	隅石	上	上		B-115裏
A-30裏	隅石	上			B-116裏
A-36	隅石	上			B-117
B-1	隅石	⊗			A-1
B-50裏	隅石	半円形		○が半分欠落？	C-45裏
B-79裏	隅石	⊗			C-87裏
C-南17角	隅石	□		長方形	D-東1角
C-15	隅石	分銅形			D-25
C-42	中央	上			
C-57	中央	上			
C-79	隅石	上			B-78
C-105	隅石	□		長方形	D-42
C東一ドから6段目	隅石	□		長方形	D南一下から6段目
C西一ドから6段目	隅石	⊗			B南一下から6段目
D-1	隅石	○×			C-14
D-26	隅石	分銅形			C-34
D-37	隅石	○×			C-63
D-49	隅石	□	ちり	長方形	C-106
D南一下から5段目	隅石	○×			C東一ドから5段目
I-1	隅石	分銅形			H-1
I-18	隅石	分銅形			H-6

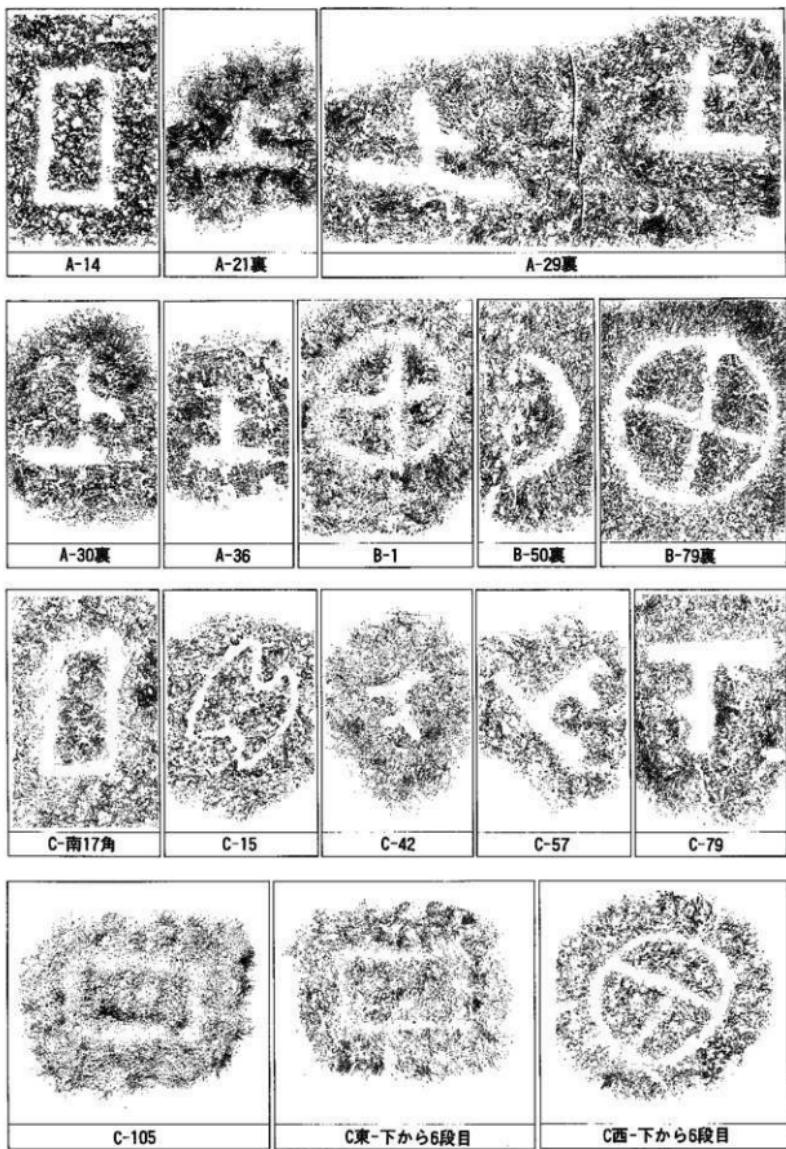
※刻印石の石材は、すべて花崗岩

刻印石合計	23個

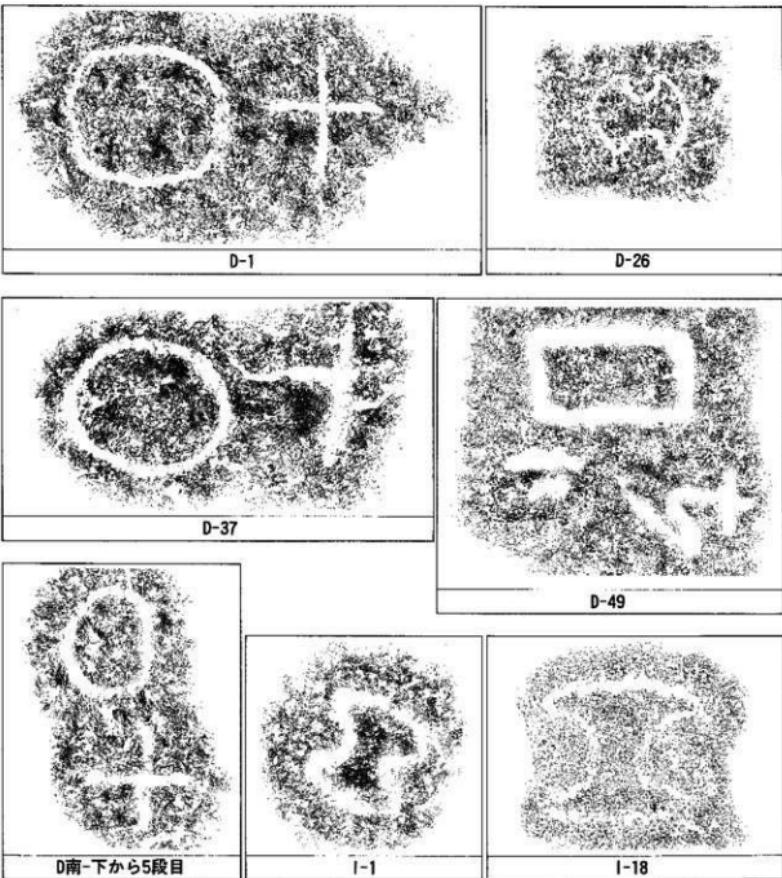
刻印種別個数	個数	割合
上	8ヶ所	32.0%
□	5ヶ所	20.0%
分銅形	4ヶ所	16.0%
⊗	3ヶ所	12.0%
○×	3ヶ所	12.0%
半円形	1ヶ所	4.0%
ちり	1ヶ所	4.0%
合計	25ヶ所	100.0%

刻印石位置別個数	個数	割合
隅石	21個	91.3%
中央	2個	8.7%
合計	23個	100.0%

第2表 地久櫓台石垣刻印一覧表



第18図 地久櫓台石垣刻印拓本① (縮尺1/4, 原則として拓本と刻印石の上方方向がほぼ一致)



第19図 地久櫓台石垣刻印拓本②（縮尺1/4、原則として拓本と刻印石の上方向がほぼ一致）

## 第2節 地久櫓台の遺構と遺物

地久櫓台では、櫓台上面で礎石群とその中央礎石直下で石組を、櫓台上部で四面を石垣で囲まれた竪穴形の地下室(穴蔵)を検出した。また、これら遺構の埋没土中、櫓台を構成している盛土・グリ石層中より出土した遺物を確認している。第2節では、先に礎石群と地下室(穴蔵)といった遺構を報告し、次いで各土層より出土した遺物について報告する。

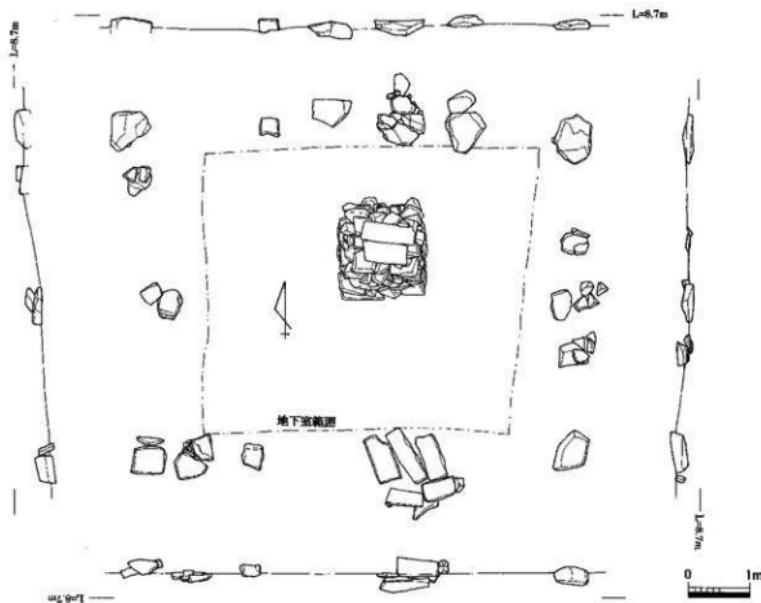
### 【礎石群】

昭和26年以降の堆積上である第1・2層と第3層の一部を除去したところ、櫓台上面で礎石群を検出した。礎石は第3層中または第3層上面に置かれたものと考えられる。南北約9.0×東西約9.0～10.5mの櫓台上面中央において、礎石群は南北約5.4×東西約7.0mの規模で平面四角形に並べられている。礎石は全部で四辺部分16ヶ所(約26石)・中央1ヶ所(2石)に並んでおり、2×3間または3×4間ともとれる配置をしている(第21図)。北辺と南辺の礎石は地下室石垣の上に載せて建物の重量に耐えられるよう工夫されているが、東辺と西辺の礎石は櫓台・地下室の石垣には載っていない。礎石上面の標高は8.4～8.7mと若干の差があり、特に南西隅が低くなっている。この理由は、当初のものか櫓台石垣の孕みに起因するものかは不明である。礎石の石材は、安山岩や角礫凝灰岩を使用している。

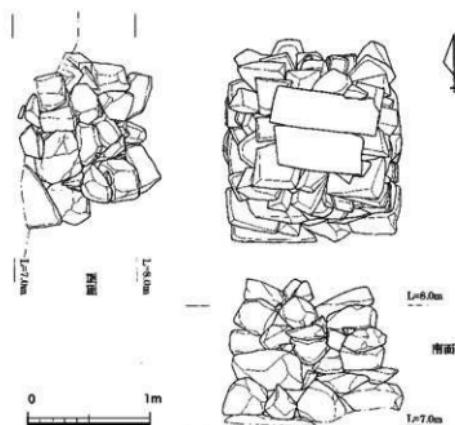
中央の礎石は、本来の中央より若干北東へずれた位置にある。板石2枚を使用しており、この板石を受けるために石組が組まれている。石組は約1.5m四方の平面に高さ約1.2mの立方体である(第22図)。第6図を見てのとおり、この石組は地下室埋土である第9・10層の上に築かれ、さらに同じ地下室埋土である第4・6・7層によって埋められている。このことは、地下室を完全に埋めて礎石を置く際、つまり礎石建物を建てる際に、中央礎石を地下室の埋土の上に置いただけでは建物の重量に耐えられないため、石組が組まれたと考えられる。なお、中央礎石上面の標高は約8.4mで、四辺の礎石に比べやや低い。



第20図 全国産業博覧会会場写真(昭和3年、南西より)



第21図 磐石群平面・立面図(縮尺1/80)



第22図 石組平面・立面図(縮尺1/40)

この磐石群の年代については、第4～10層より明治時代後半の磁器が出土しており、明治時代後半以降と考えられる。昭和3年の写真(第20図)を見ると、地久櫓台の上に瓦葺き平屋建ての木造建物が写っている。建物の壁は、櫓台石垣より少し内側に位置し、今回検出した磐石群の位置と一致する。このことから、磐石群は写真に写っている建物の磐石と考えられる。なお、この建物が建てられた目的や存続期間については文献にはなく不明である。

## 【地下室（穴藏）】

櫛台中央において検出した堅穴である。第7図の平面図のとおり南北約4.3m×東西約4.8～5.2mを測り、北東隅が突き出た四角形である。これは、櫛台上面そのものが同様な形をしているため、地下室も同じ平面形になったものと考えられる。地下室の四壁は石垣であり（第17図）、石垣の高さは約2mを測るが、石垣の下端約20cmが床面の細砂によって埋まっており、実際の地下室の高さは約1.8m（1間）となる。床面は土間となっており、第6図11層（細砂層）上面が床面に該当する。床面中央に約50cm大の礎石1個が、四壁の中央寄りに1個ずつ約20～40cm大の礎石が置かれており、上から見るとちょうど十字形を呈している。これら礎石は、地下室天井つまり櫛1階部分の床板を支えていた柱を受けていたものと考えられる。

地下室の四隅、つまり4面の石垣の合わせ目を観察すると、それぞれ前後関係があることが看取できる。例えば、東側石垣の南端は南側石垣よりさらに奥にあるが、南側石垣は東側石垣にあたって終わっている。これは、最初に東側石垣を積み上げた後、南側石垣を積み上げたものと推測される。他の四隅も同様に観察すれば、地下室石垣は、東→南→西→北の順番に積み上げられたと推測できる。一方、始端であり終端でもある北東隅の石垣合わせ目は前後関係がはつきりせず、他の隅と違って別の組み方をしているかもしれない。なお、地下室石垣解体時に、北東隅の裏側において、基底石と同じ高さで東西方向の石列が検出されている（図版10-2）。

この地下室の年代について検討すると、地下室石垣と櫛台石垣の間を埋めている細砂層であるa層や床面を形成している第11層より17世紀前半の磁器が出土していることから、地下室は17世紀前半以降に建造されたものと考えられる。一方、地下室を埋めていた第5～10層から明治時代の磁器が出土していることから、天守閣が取り壊された明治17年（1884）に近い時期に地久櫛も壊され、その後地下室も埋められたと考えられる。なお、東壁中程の石と石の間に丸瓦（第35図141）が差し込まれていたが、石垣積み上げ時まで遡るかどうか不明である。

## 【櫛台出土土器・石製品（一部）】

第1～2層は、礎石建物廃絶後に堆積した土層である。第1層から染付碗（第23図1～3）、陶器（4・5）、備前焼鉢（6・7）、土師質土器（8・10）、土錐（9）が出土している。染付碗（3）は、広東碗と呼ばれるものである。陶器碗（5）は、刷毛目唐津と呼ばれるもので、17世紀後半頃のものである。第2層からは昭和26年銘の5円玉（11）が出土しており、第1・2層の堆積が昭和26年以降であることがわかる。

第3～4層は、櫛台上面にあった礎石群を置いていた土層である。第4層から、染付碗（12・13）、染付皿（14）が出土している。どれも銅板転写によるもので、12・14が型紙模と考えられ、染付はすべて明治時代以降のものであることから、第3～4層は明治時代以降の堆積層と考えられる。

第5～10層は、櫛台中央にあった地下室の埋土である。

第5層から染付碗（15・16）、染付皿（17）が出土している。どれも銅板転写によるもので、15・16が型紙模とと考えられ、染付はすべて明治時代以降のものである。

第6層からは、陶器徳利（18）、磁器碗（19）、瓦器碗（20）、土師質土器（21～27）が出土している。陶器徳利（18）は信楽焼の可能性がある。土師質土器（21～27）は、小皿（22）、椀（23）、鍋（24）、甕（25）、櫛鉢（26）、脚部（27）と様々な器種が見られる。

第7層からは、染付皿（28）、染付碗（29～32）、瀬戸美濃瓶掛（33）、青磁碗（34）、土師質土器小皿（35）、弥生土器小型丸底土器（36）が出土している。染付（28～30）は、銅板転写で型紙模によるもので、明治時代以降のものである。瀬戸美濃瓶掛（33）は、火鉢と想定されるもので、19世紀と推定される。青磁碗（34）は、肥前系のもので17世紀第3四半期のものと考えられる。弥生土器小型丸底土器（36）は、弥生時代後期後半のものである。

第10層からは、磁器大鉢（第24図37）、染付碗（38）、染付仏飯具（39）、備前焼櫛鉢（40）が出土している。磁器大鉢（37）の破片は、この第10層以外にも西土櫛台第1層や同グリ石層、本丸第1層からも出土し、接合した。この大鉢（37）は、中国漳州窯産で一般に呉須赤絵と呼ばれるもので、16世紀末～17世紀前半のものと推定される。染付碗（38）は、銅板転写で明治時代以降のものであ

る。染付仏飯具（39）は、肥前系で18世紀後半頃のものである。

以上のように、地下室を埋めていた第5～10層の各層から明治時代以降の染付が出土していることから、第5～10層は明治時代以降のものと考えられる。

a～k層は、櫓台石垣と地下室石垣の間を埋めている土層である。a層からは、染付碗（41）、染付皿（42）、備前焼鉢（43）、土師質土器小皿（44）、上御質上器皿（45）、須恵器壺（46）、弥生土器高杯（47）、円筒埴輪（48）が出土している。染付碗（41）皿（42）は、中国漳州窯産で16世紀末～17世紀初頭のものと推定される。備前焼鉢（43）は、15世紀後半～16世紀前半のものである。弥生土器高杯（47）は、弥生時代後期のものである。

第11～37層は、櫓台で主体をなす土層である。第11・17～23層からは、陶器皿（49）、上御質土器皿（50）、土鍤（51）が出土している。陶器皿（49）は、肥前産で17世紀前半のものである。第27層からは、弥生土器底部（52）が出土しており、弥生時代後期のものである。

a～k層および第11～37層から出土している土器を概観した場合、古い時期の混入した遺物を除去すると、17世紀前半という年代観が推定され、この年代は地久櫓台および地下室の築造時期を反映するものと考えられる。この17世紀前半は、高松城主が生駒家から松平家に代わる時期でもある。寛永19年（1642）に初代高松藩主となった松平頼重は、高松城の改修に着手し、その完成を記念して描かせたのが第5図「高松城下図屏風」と考えられている。櫓台に地下室を造るなどの工事は、上部構造である地久櫓も撤去しなければならない大規模なものであり、これだけの工事を実施する機会は、城主家の交代に伴う城の改修時と考えるのが現時点ではもっとも妥当であろう。

また、a～k層および第11～37層から出土している土器は、古い時期の混入した遺物を除去すると、輸入陶磁器であり高級品であった中国漳州窯産の染付が占める割合が高い。これは、地久櫓台が本丸に位置することに起因すると考えられる。

櫓台内部の十層以外に、石垣裏込のグリ石層や根石下から遺物が出土している。これらの遺物については、石と石の隙間が大きいことから混入した可能性や、石垣H・Iのように明らかな後世の積み直しが認められるものもあり、櫓台の年代を示唆するものではないと考えられる。

石垣I・J交差部の根石下から、上師器杯（第25図53）が出土している。石垣Bグリ石層から、屋根型の石材（63）がグリ石に転用されている。石垣C・Dつまり櫓台南東部分グリ石層から、土師器小皿（54）、備前焼鉢（55）、須恵器壺（56）が出土している。石垣Cグリ石層から、堺または明石産の播鉢（57）、五輪塔の水輪（62）が、石垣Dグリ石層から弥生土器壺底部（58）が出土している。石垣H・Iは、新しい積み直しが認められ、土師器小皿（59）、土鍤（60）、ガラス瓶（61）が出土している。

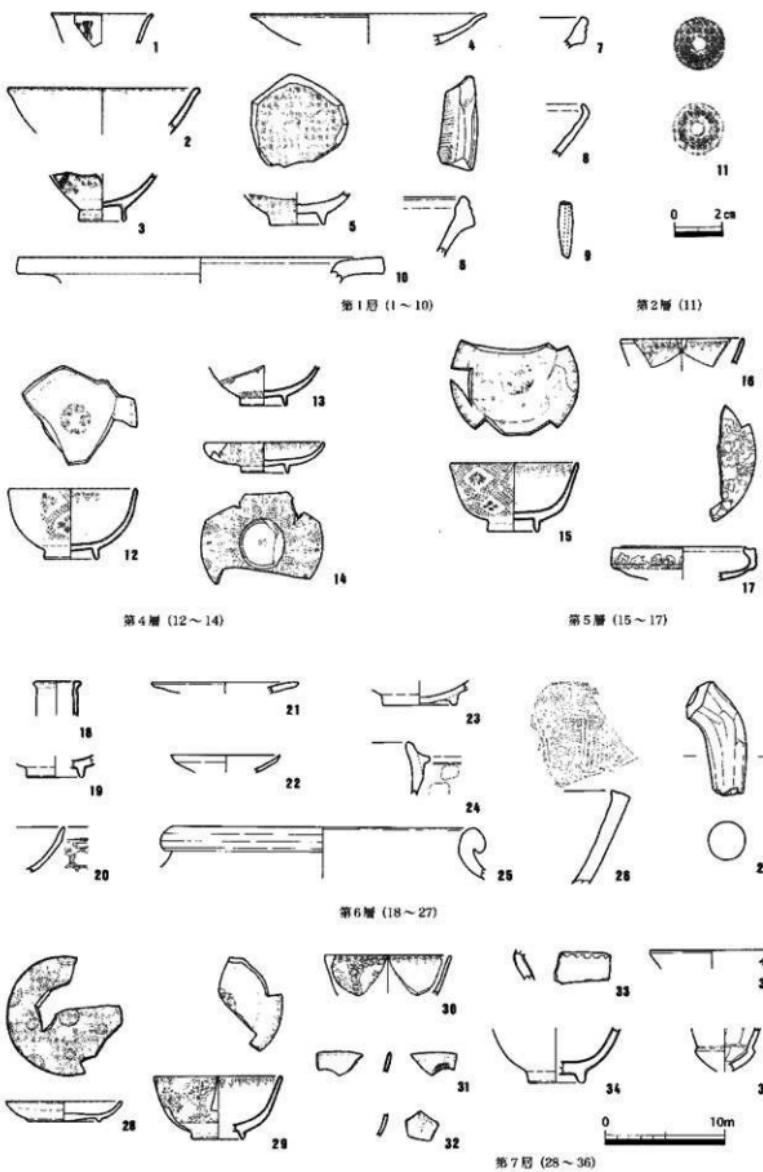
最後に、江戸時代～明治時代の遺物に混じって、弥生土器や須恵器、埴輪、さらに中世の土器類が出土していることに触れておきたい。この現象は、地久櫓台に限らず、城内の他地点でも同様である。中世の土器については、第2章第2節で触れたとおり、高松城下町が古代末～中世の港町の上に成立していることに起因する。また、弥生土器についても、同様に弥生時代後期の包含層が確認されている。そうすると残る須恵器や埴輪に関係する古墳時代の遺構が、城下町内で見つかる可能性がある。

### 【櫓台出土瓦】

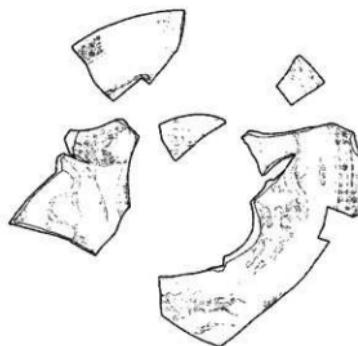
櫓台から最も大量に出土しているのは瓦である。ここでは、軒瓦・道具瓦を中心に図示している。ただし、出土した層位は明治時代以降の埋土である第1～10層からがほとんどで、出土した瓦（第26～32図64～138）は江戸時代以降のものである。

軒丸瓦は、三巴紋に珠文をめぐらすものがほとんどで、1点のみ無文（81）のものが出土している。軒丸瓦の調整を観察すると、瓦当にキラコを使用しているもの使用していないもの两者があり、丸瓦部の凹面にコビキB調整が見られるもの（64・94・75・117・118・121・122）もある。

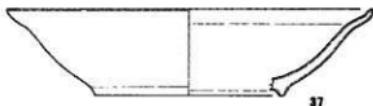
軒平瓦は、中心飾りから分類して、桐文（83）・半歳花菱文（85・112・135・136）・花菱文（134）・家紋（111）・三葉文（137）が出土している。これらのうち、83・111は瓦当中心が垂下するものである。また、軒棧瓦（86・87・113）もわずかだが出土している。



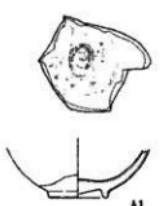
第23図 橋台出土遺物実測図① (縮尺 1/4,1/2)



第10層 (38~40)



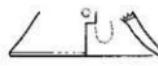
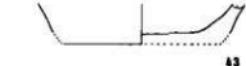
第10層ほか (37)



41

43

45

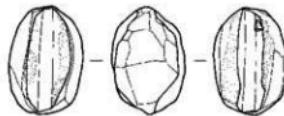


42

44

46

a層 (41~48)

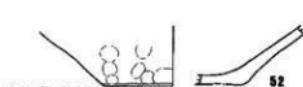


49

50



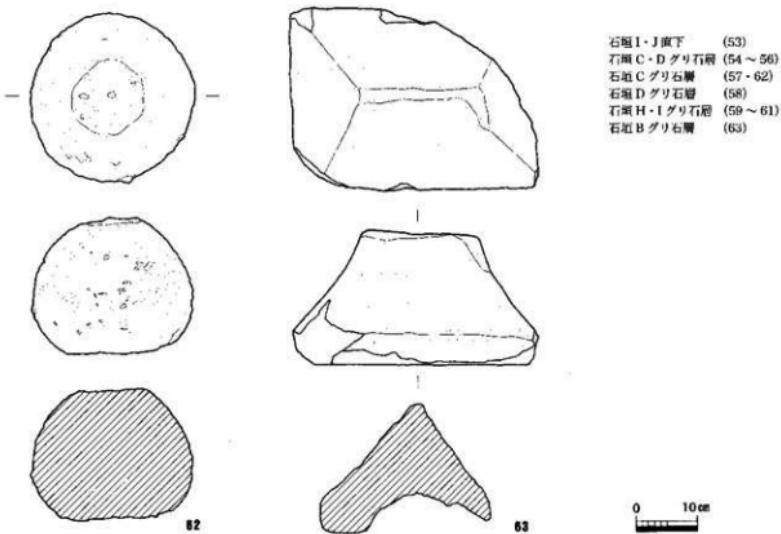
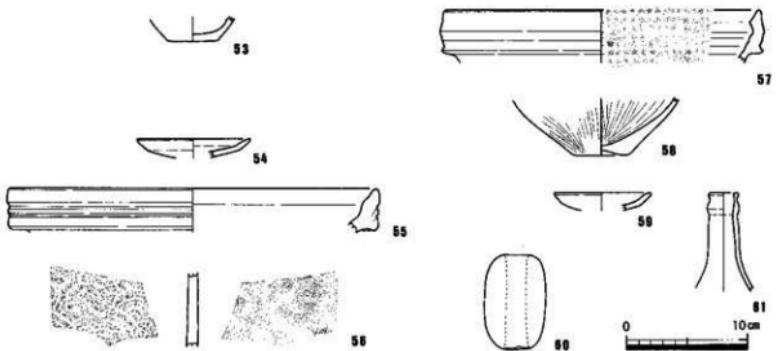
第11・17~23層 (49~51)



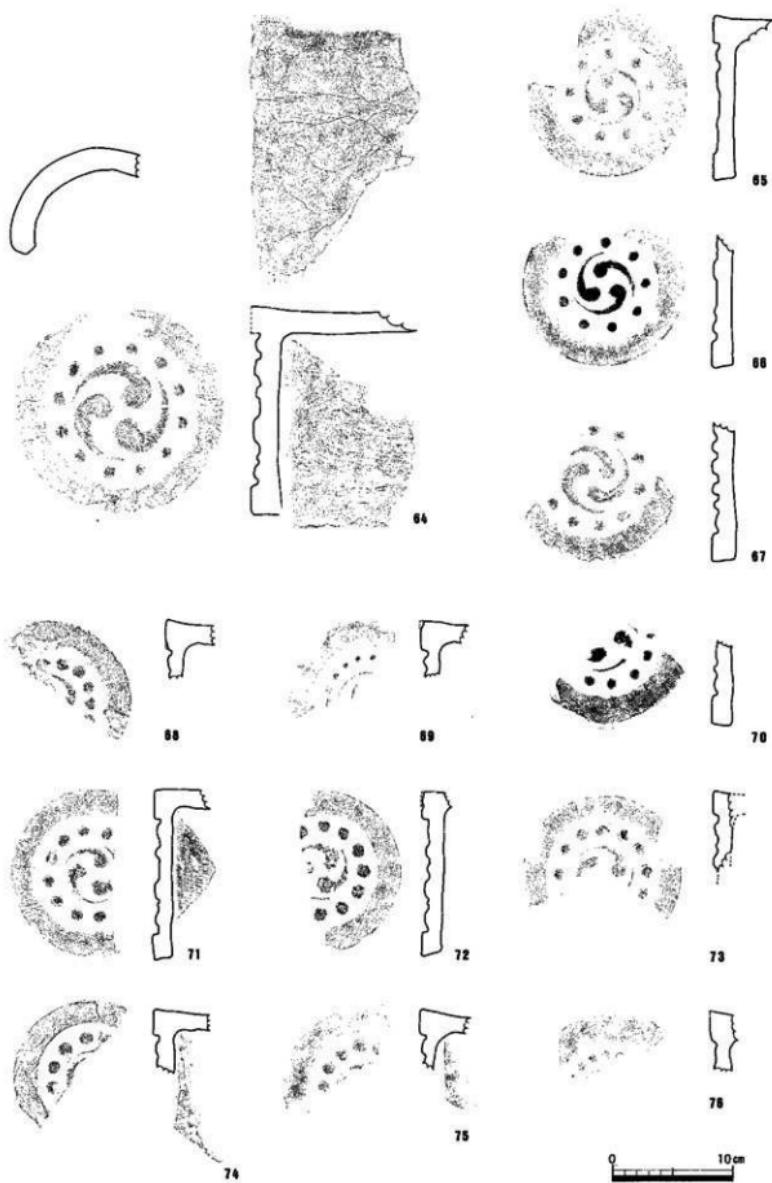
第27層 (52)

52

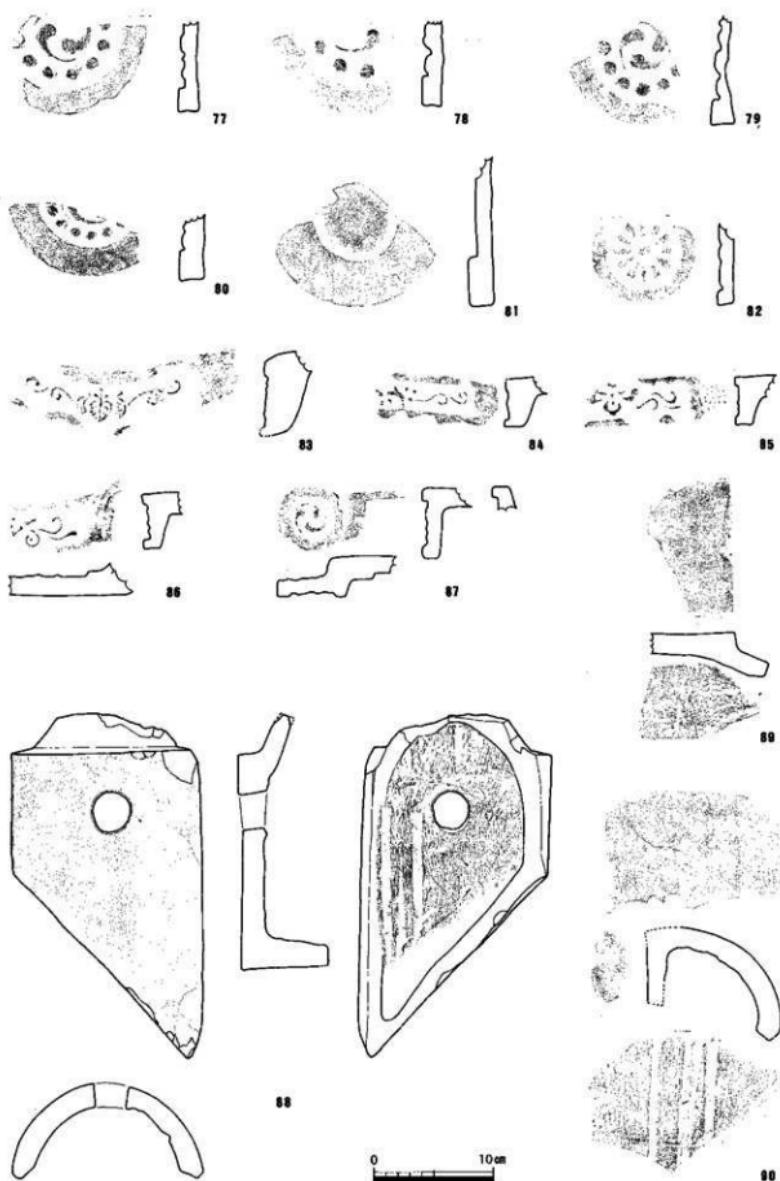
第24図 檜台出土遺物実測図② (縮尺1/4)



第 25 図 橋台出土遺物実測図③ (縮尺 1/4,1/8)



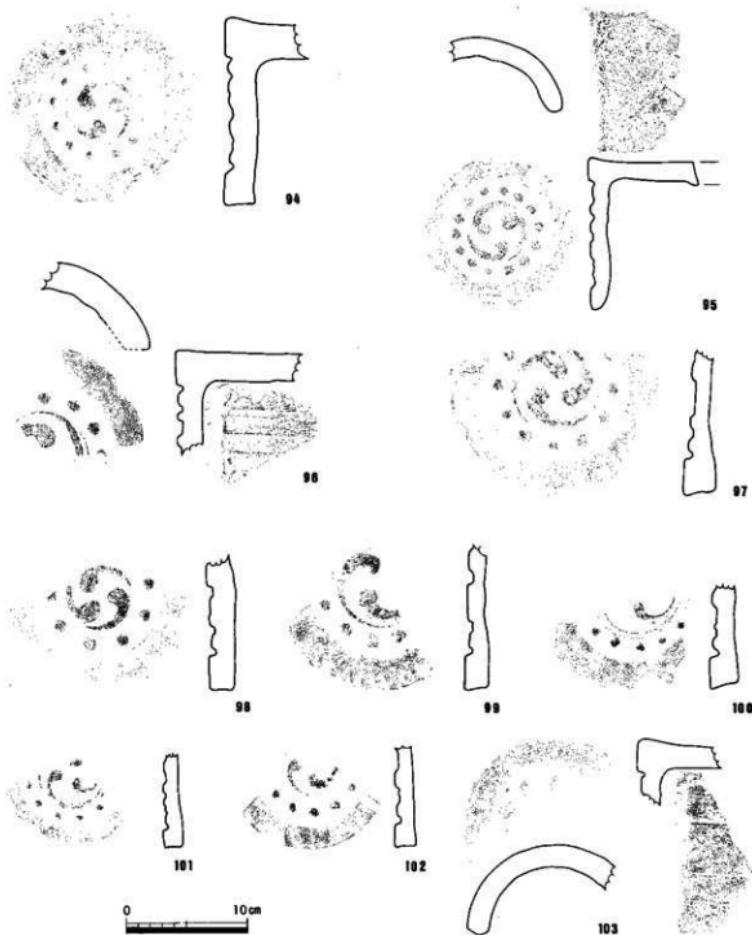
第26図 檜台第1層出土瓦実測図① (縮尺1/4)



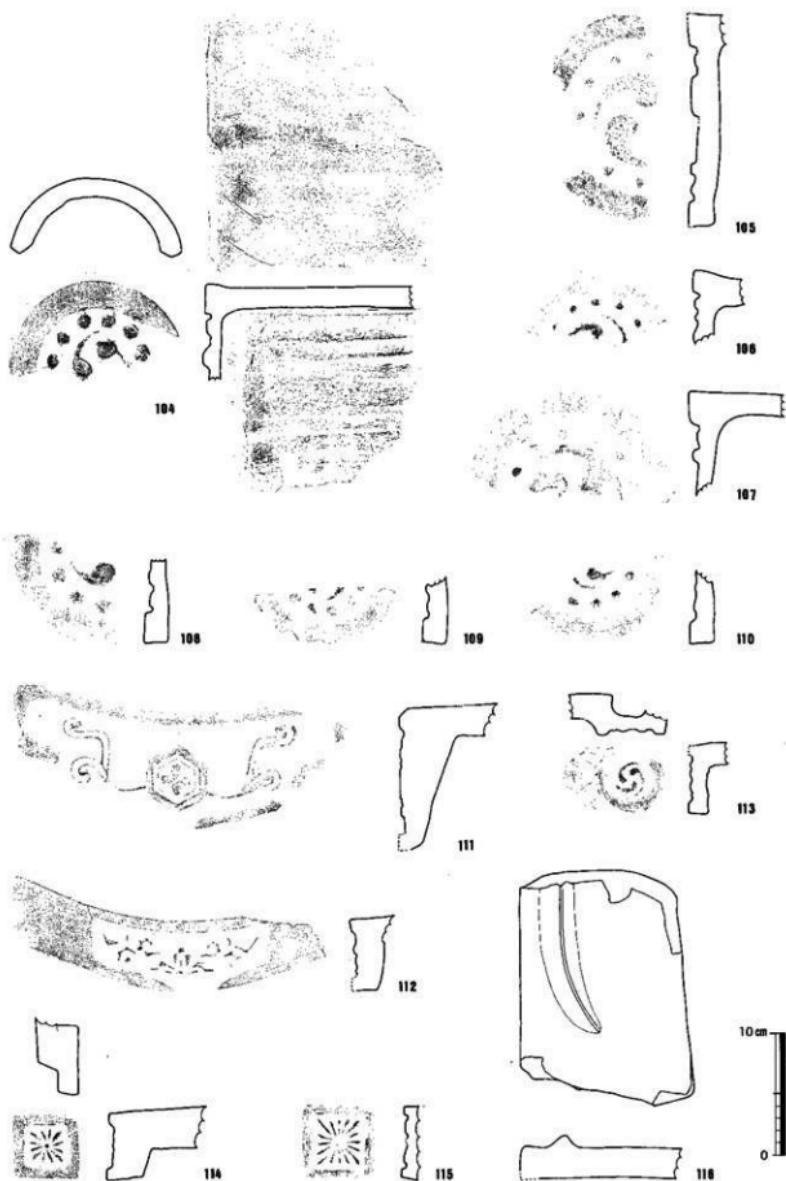
第27図 檜台第1層出土瓦実測図②（縮尺1/4）



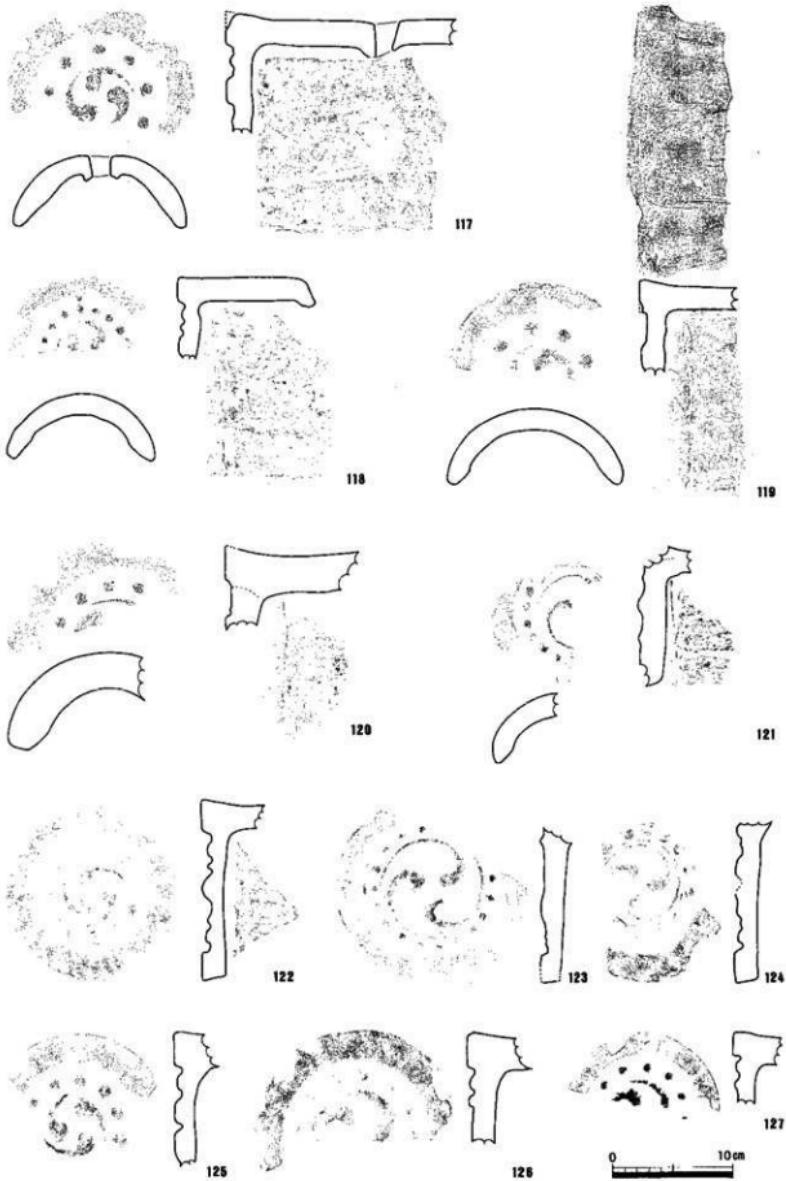
第28図 横台第6層出土瓦実測図(縮尺1/4)



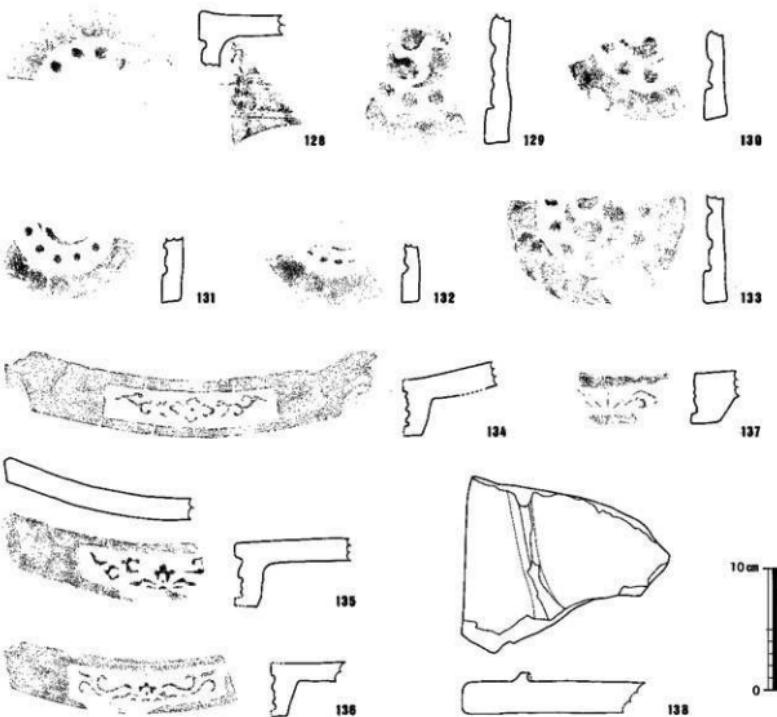
第29図 横台第7層出土瓦実測図①(縮尺1/4)



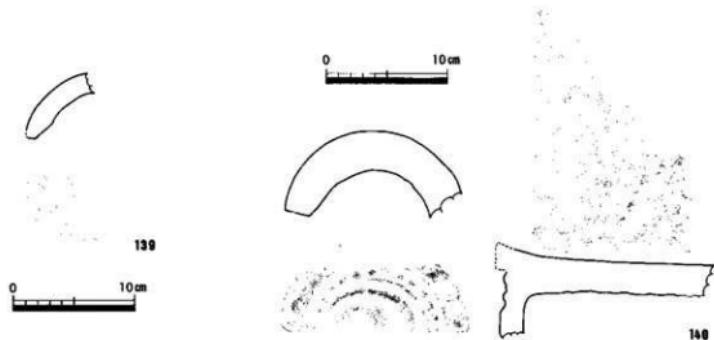
第30図 檻台第7層出土瓦実測図②（縮尺1/4）



第31図 横台第10層出土瓦実測図①(縮尺1/4)

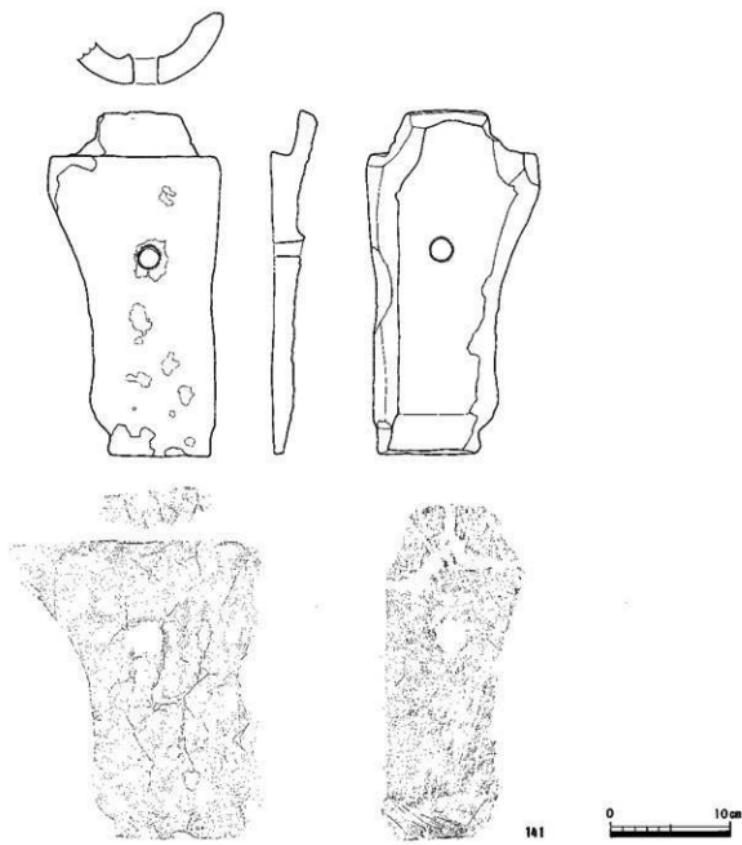


第32図 檜台第10層出土瓦実測図②(縮尺1/4)



第33図 檜台第11層出土瓦  
実測図(縮尺1/4)

第34図 檜台B石垣グリ石層出土瓦実測図(縮尺1/4)

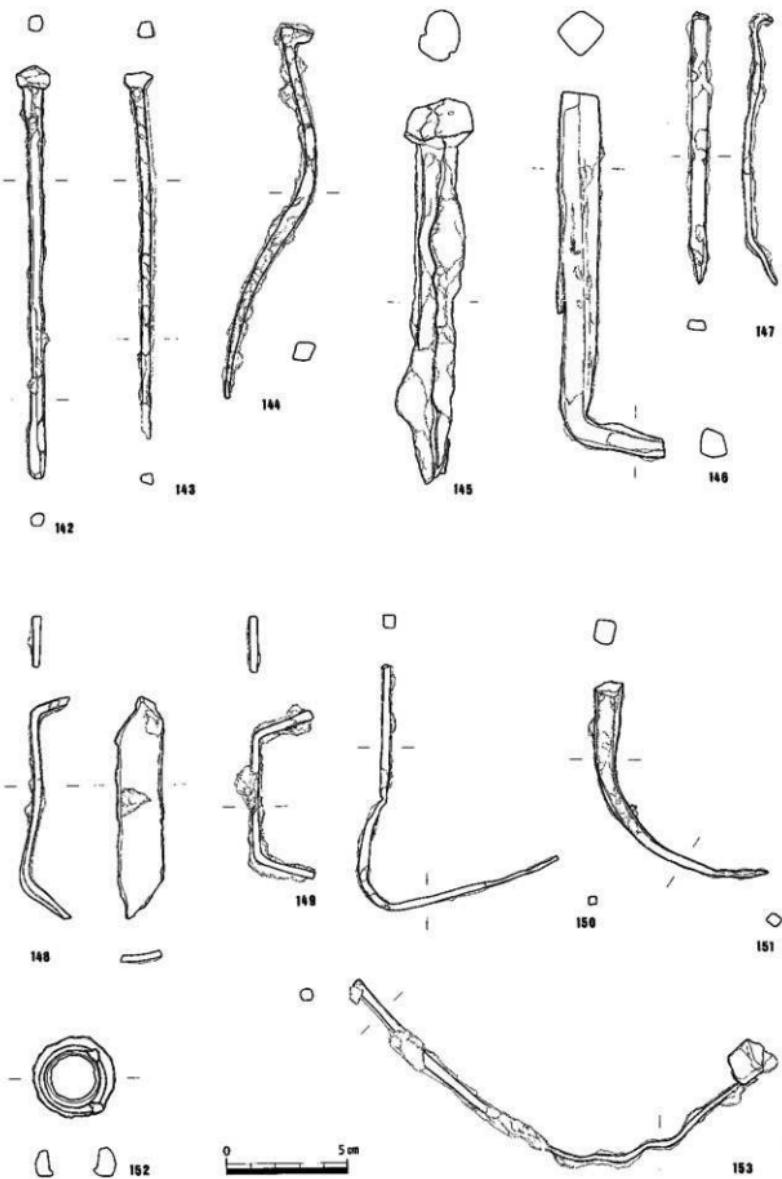


第35図 地下室東壁出土瓦実測図（縮尺1/4）

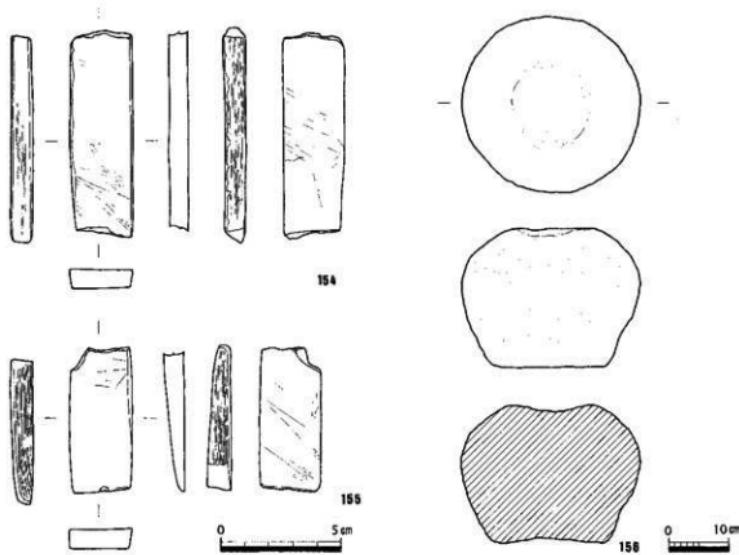
丸瓦（88）は隅用に使われたものと考えられ、斜めに大きく半裁され、釘穴が貫通している。丸瓦（89）は、○に「八」の刻印をもっており、凹面の調整はコビキBである。

棟飾り瓦は、瓦が丸いもの（82）と四角なもの（114・115）が見られる。

他に用途不明の瓦として、丸瓦の片側が折れてまっすぐなもの（90）、板状に突帯が付いているもの（116・138）が出土している。



第36図 檻台および南土塙台・本丸出土鉄製品実測図（縮尺1/2）



第37図 構台出土石製品実測図（縮尺1/2,1/8）

以上、報告した第1～10層以外からは、第11層から丸瓦（第33図139）や石垣Bグリ石層から軒丸瓦（第34図140）が出土しており、江戸時代のものである。

また、地下室東壁（石垣）中程の石と石の間に、丸瓦（第35図141）が差し込まれていた。この丸瓦の凹面調整はコビキBで吊り紐痕が残り、釘穴が貫通している。

#### 【構台出土石製品】

構台からは、鉄製品（第36図142～149・151・152）も出土している。すべて明治時代以降の第1～10層から出土しているため、時代の特定は現段階では難しい。鉄釘は、細いもの（142～144）と太いもの（145・146）が見られる。かすがいと想定される金具（147～149）や鉤状のもの（151）、輪状のもの（152）も出土している。

#### 【構台出土石製品】

第25図で報告した以外にも、石製品が出土している。第7層から出土した石製品（第37図154・155）は、砥石と想定される。第10層からは、五輪塔の水輪（156）が出土している。

#### 参考文献

佐藤電馬 2001「山上瓦の分類・整理」『平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告』  
財團法人香川県埋蔵文化財調査センター

### 第3節 本丸西土壠台と遺物

本丸西土壠台は、現在、地久櫓台から約3.5mのところで途切れ、更に約20mの間隔をおいて、再び始まっている。途切れた断面には石垣（第15図K面）が組まれ、当初から途切れていたかのような印象を受ける。しかしながら、第5図「高松城下岡屏風」（17世紀中頃）や図示していないが「高松城古図」（慶応2年（1866））を見ると、土壠台は途切れることなく続いている、土壠台の上に櫓が描かれている。なお、第20図「全国産業博覧会会場写真」（昭和3年）では、対象物が小さく判別しづらい。このことから、おそらく明治時代以降に土壠台が崩れ、もしくは壊され、その後現状に戻さず、途切れた断面に石垣を築いたと推定される。さらに、土壠台東西面の石垣（J面上部・L面最上部）についても、地久櫓台と組み合っておらず、櫓台石垣が土壠台の中に隠れることから土壠台石垣が櫓台石垣よりも新しいことを考慮すると、土壠台東西面の石垣も明治時代以降に積み直している可能性がある。

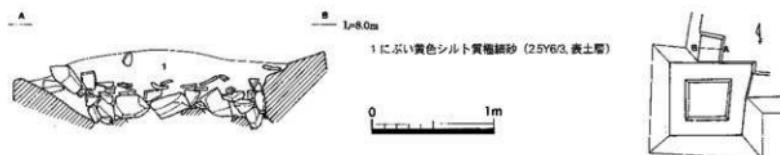
土壠台最上層の土層については、第38図横断面図のとおりである。ここから、三巴文軒丸瓦（第39図157～159）と三葉文軒平瓦（160）が出土している。さらに、これより下については、第6図の縦断面図のとおりである。第38図の第1層（表土層）の下には、グリ石層があり、その下には⑤～⑦層そして第11～34層と続く。⑥～⑦層と第11～34層は櫓台と共に土壠層で、第11層以下は17世紀前半の年代観が得られているが、⑥～⑦層については遺物が出土していないため時代の特定はできない。なお、⑥～⑦層は櫓台でも西土壠台接合部分でしか見られない。また、土壠台のグリ石層については、石垣を修築すれば必然的に手を入れられていると推測され、実際、三巴文軒丸瓦（第40図161）や三葉文軒平瓦（162）を始め瓦片が多数出土している。

### 第4節 本丸南土壠台と遺物

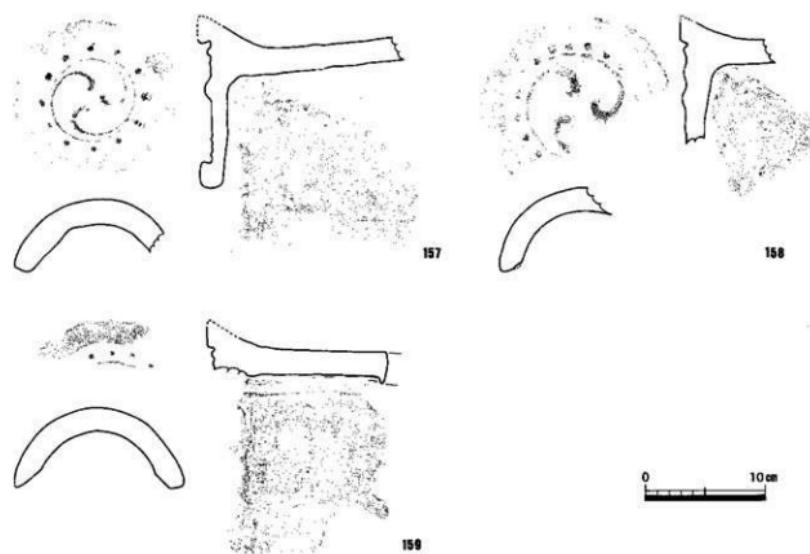
本丸南土壠台は、地久櫓台と本丸南東隅をつないでおり、第5図「高松城下岡屏風」では板葺きの土壠が描かれている。南土壠台を横から概観すると内側に湾曲しているが、これは今でもダムの形態に見られるように、力学的に崩壊を防ぐために設計されたものと考えられる。次に土壠台の石垣を概観すると、外側のE面は他の石垣と共通した積み方・石材だが、内側のG面のみは石材が小さく、積み方も石材を斜めに積み上げる「落とし積み」という新しい技法が見られることから、石垣G面は近世後半以降の大規模な修築による可能性がある。

平成13年度の工事では、櫓台から約4.6mまで土壠台を解体したのに伴い、縦断面と横断面図（第41図）を作成した。横断面を観察すると、第1～4層は石垣の上にも堆積している比較的新しい堆積層、土壠台全面に敷かれた疊群である第5層、土壠台の根幹をなす第6～15層、そしてE・G面それぞれのグリ石層に分かれれる。ちなみに第5層疊群の検出状況は、第7図の平面図で表している。縦断面は、土壠台と櫓台の関係を示し、土壠台第6～15層の下に櫓台の十層である第16～18層（櫓台第16・17・23・24層対応）が堆積している。

出土遺物は、第2層から土師質土器（第42図163）、須恵器捏鉢（164）、弥生土器高杯（165）、底部（166）、三巴文軒丸瓦（167・168）、花菱文軒平瓦（169）、鉄製品（第36図150）が出土している。土師質土器（163）と須恵器捏鉢（164）は、中世後半のものと考えられる。三巴文軒丸瓦（167）は、瓦当中央が欠損して不明であるが、巴文の中に更に文様をあしらったものである。第3層からは、三巴文軒丸瓦（第43図170）、花菱文軒平瓦（171）が出土している。第4層からは、土師質土器（第44図172）が出土している。図化していないが、G面グリ石層より瓦片が多数出土している。



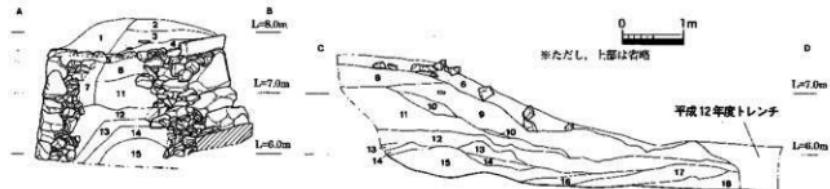
第38図 本丸西土壙台断面図（縮尺1/40、上部のみ）



第39図 本丸西土壙台第1層出土遺物実測図（縮尺1/4）

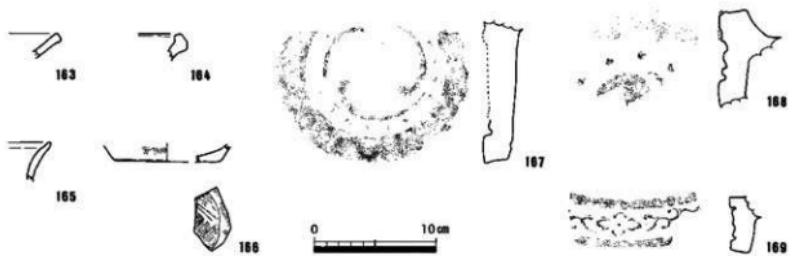


第40図 本丸西土壙台グリ石層出土遺物実測図（縮尺1/4）

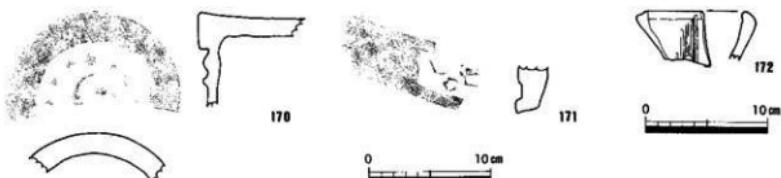


- 1 深紅  
 2 にいき黄色シルト質粘土砂 (2.5t/3, 深吸をわずかに含む, 表土層)  
 3 淡黄色シルト質粘土砂 (2.5t/3, 深吸を多く含む)  
 4 灰黄色シルト質粘土砂 (2.5t/2)  
 5 にいき黄色細砂 (7.5t/3)  
 6 にいき黄色細砂 (2.5t/4, 中深を含む)  
 7 褐灰色細砂 (7.5t/1, G層裏込石間の土)  
 8 褐灰色シルト質粘土砂 (7.5t/2)  
 9 灰オリーブ色シルト質粘土砂 (5t/3, オリーブ黄色(5t/3)細砂をブロック状に含む)  
 (堆台部壁付近)  
 10 灰色シルト (10t/1)  
 11 灰色シルト (5t/1, 2~5cm 大の円礫を多く含む, 褐鉄鉢を多く含む)  
 12 灰色シルト (5t/1, 鉄鉢を多く含む)  
 13 淡黄色細砂 (7.5t/3, 黄灰色細砂 (2.5t/1)をブロック状に含む)  
 14 淡黄色細砂 (7.5t/3)  
 15 褐白色細砂 (5t/2, 灰オリーブ色シルト (5t/2)をブロック状に含む, 褐鉄鉢を含む)  
 16 オリーブ黄色陶一帯 (5t/3, 壁台部 16 層附近)  
 17 灰色シルト (10t/1) + にいき黄色中砂 (2.5t/3) (堆台部 17~24 層附近)  
 18 にいき黄色粗砂一帯 (10t/2) (堆台第 23 層附近)

第 41 図 本丸南土堀台断面図 (縮尺 1/80)



第 42 図 本丸南土堀台第 2 層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)



第 43 図 本丸南土堀台第 3 層出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

第 44 図 本丸南土堀台第 4 層  
出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

## 第5節 本丸の遺構と遺物

地久櫓台解体工事に伴って、接する本丸平坦地の一部も削り取られる可能性があるため、平成12年度に遺構の状況を確認するためのトレンチを設定し調査した。さらに、平成13年度には、櫓台北東と西土堀台石垣（H・I・J・K面）の根石直上まで解体が及ぶため、根石の確認を目的として、櫓台・西土堀台に沿ってトレンチを設定し調査した。

本丸平坦地の基本土層は、第1・2層を埋土として、第3層上面が遺構面、第3層以下が本丸造成の盛土と考えられる（第47図）。なお、西土堀台が本来あった場所である西土堀台北側（第47図C-D断面）においては、東半分は第2層の下に第4層が存在するが、西半分は第2層の下に石垣L面の裏込であるグリ石層が存在する。

次に、第3層上面で検出した遺構は、礎石、石敷、石列1、石列2、埋甕など（第45・46図）である。なお、これら遺構の前後関係は不明である。

礎石は、西土堀台と櫓台に沿って接するように並んでおり、現況で1間×1間で東西両側に庇がつく建物と推定される。実際、庇用と推定される礎石は、建物用と推定される礎石より小さい。建物の規模は、南北3.6m、東西1.8mで、庇の出が東で約60cm、西で約90cmである。建物の方位は、N 9° Eで、西土堀台とほぼ並行する。東屋の可能性がある。

石敷は、西土堀台北東隅から東へ向かって幅約1mで、直径約20～30cmの石を敷いている。その方向は櫓台と並行しており、礎石建物内を通過している。

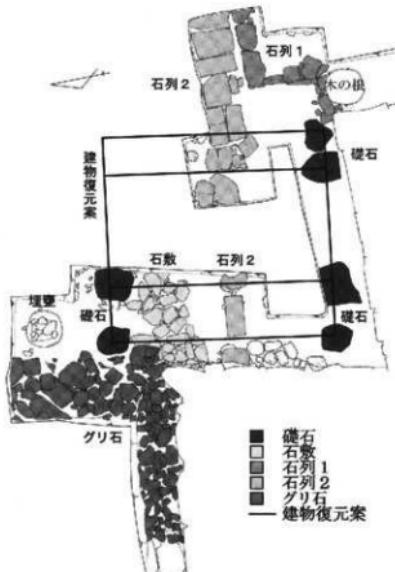
石列1は、櫓台北東隅から鉤形に曲がって東へのびる石列である。直径約30～60cmの石を櫓台・南土堀台に並行して並べておらず、石の平面を本丸内側に揃えている。

石列2は、西土堀台から東へ向かって、一辺約30～65cm四方の平石を並べている。その方向は櫓台・南土堀台と並行しており、礎石建物内のはば中央を通過している。礎石建物が東屋であれば、庭園内の石敷きの小道と考えられる。

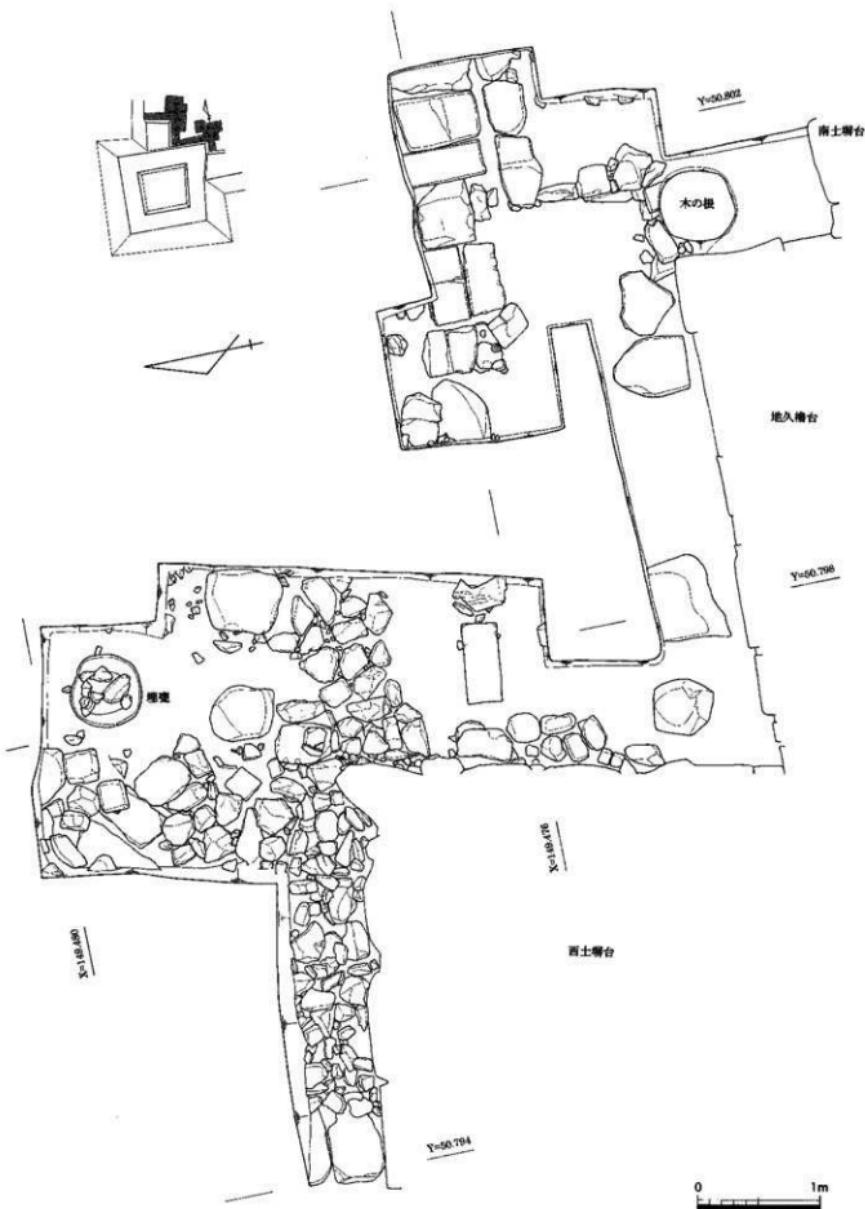
埋甕は、直径約70cmの土師質土器甕を、地面に約40cm埋め込んだもの（第50図）で、下半分のみが現況で残り、上半分の破片は甕内に落ち込んでいた。

これら遺構については、第5図「高松城下園屏風」（17世紀中頃）や第20図「全国産業博覧会会場写真」（昭和3年）に描かれていたり写っている建物と比較したが、調査面積が狭く特定できない。

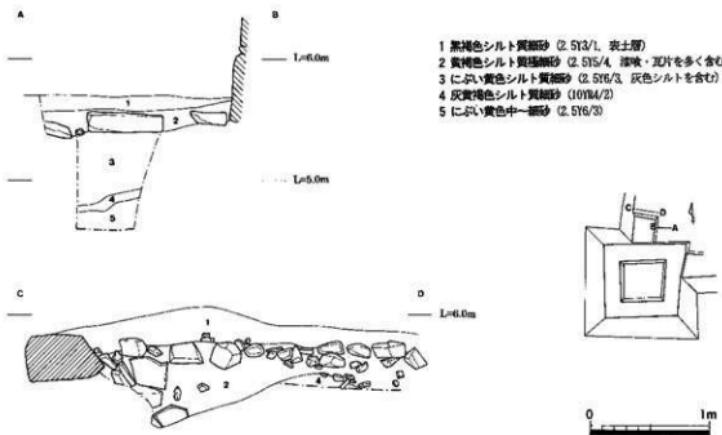
一方、出土遺物は、これら遺構を覆っていた第1・2層から出土している。第1層からは、染付碗（第48図173）、弥生土器甕（174）、三巴文軒丸瓦（175）、鐵製品（第36図153）が出土している。染付碗（173）は、中国漳州窯産で17世紀前半のものである。第2層からは、磁器甕（第49図176）、三巴文軒丸瓦（176・177）、用途不明瓦（178）が出土している。磁器甕（176）は瀬戸美濃産で、19世紀のものである。



第45図 本丸遺構復元図（縮尺1/80）



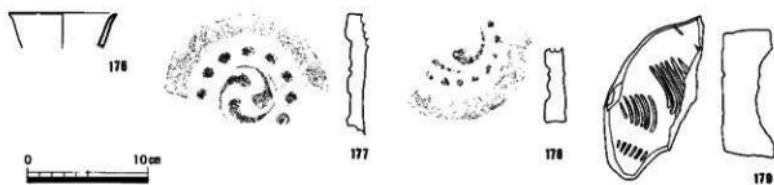
第46図 本丸遺構配置図 (縮尺 1/40)



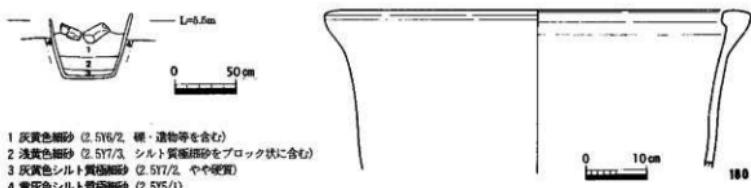
第47図 本丸土層図(縮尺1/40)



第48図 本丸第1層出土遺物実測図(縮尺1/4)



第49図 本丸第2層出土遺物実測図(縮尺1/4)



第50図 本丸埋壙断面図・実測図(縮尺1/40, 1/8)

## 第4章 まとめ

### 第1節 地久櫓台の変遷

地久櫓台の変遷は、大きく4時期に分かれる。

#### 第1期【安土桃山時代～江戸時代前期（生駒期）】

高松城は、天正16年（1588）に生駒親正が築城を開始したことに始まる。築城当初から地久櫓台が存在したのかどうかについては不明であるが、寛永4年（1627）の「讚岐探索書」や寛永15～16年（1638～1639）製作と推定される「生駒家時代讚岐高松城屋敷割図」には、すでに地久櫓が描かれている。地久櫓が小天主的役割を担っていたことを考えると、築造当初から存在したと推定される。

#### 第2期【江戸時代前期～明治時代初頭（松平期）】

寛永19年（1642）に松平頼重が高松城主となると、城の大規模な改修に着手し、この完成を記念して描かせたのが第5図「高松城下町屏風」（17世紀中頃）といわれている。地久櫓も大規模な改修を受けたと想定でき、櫓台中央で検出した竪穴の地下室（穴藏）は、出土遺物からこの改修時に造られたものと推定される。「高松城下町屏風」に描かれた地久櫓は、黒壁の二層の建物で、屋根は瓦葺きである。

#### 第3期【明治時代中頃～昭和20年代頃】

明治17年（1884）に犬守閣が取り壊されなど、城内にある建築物の解体が明治時代に進んだようである。地久櫓台の地下室（穴藏）もこの頃に埋められていることから、当然、地久櫓もそれまでに取り壊されたと考えられる。高松城の所有は、松平家に依然引き継がれていたが、天守台には松平頼重を祭った玉藻廟が造られ、本丸には社務所などが造られたという。第20図「全国商業博覧会会場写真」（昭和3年（1928））を見ると、櫓台には平屋の建物があり、この建物に伴う礎石を櫓台上面で検出している。

#### 第4期【昭和時代】

昭和29年に高松城は松平家から高松市に譲渡されたが、本丸にあった玉藻廟関連施設はこの時期頃に撤去されたと考えられる。櫓台にあった平屋建物も取り壊されたようで、平屋建物撤去後にできたと考えられる櫓台中央の窪み底より、昭和26年銘の5円玉が出土していることから、昭和26年以降に平屋建物が取り壊されたと考えられる。

### 第2節 地下室（穴藏）について

櫓台中央で検出した竪穴の地下室（穴藏）は、櫓台・地下室を構成する上層から出土した陶器より17世紀前半以降に造られたものであり、松平頼重が入封直後に行なった高松城の改修に伴うものと推定されることはない。先に報告したとおりである。この地下室への出入は、上からおそらく梯子等を使って昇り降りしたものと推定される。他の城郭に類例を求める場合、天主台のように櫓台側面から出入りして櫓上部へ昇る例は散見できるが、櫓台の上から、すなわち建物内部から出入りする類例は今のところ不明である。一方、各郭内などの平坦地に地下室（穴藏）を設ける例は散見でき、史跡岡山城跡本丸中の段や史跡人吉城跡相良清兵衛屋敷跡などの例がある。なお、京都では室町時代から石組をもつ穴藏が出現し、江戸時代中期になると正方形の石組をもつ穴藏が頗著になるという。（瀬内明博 1992）

また、地久櫓台の地下室の用途については、地下室そのものの記録が残ってなく、用途を示す出土遺物もないため不明である。地久櫓が本丸南西隅を守る重要な位置を占めることから有事用または備蓄するための倉庫などが想定可能であるが、今後、類例調査等を通して明らかにしていきたい。

### 参考文献

岡山市教育委員会 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告書』

人吉市教育委員会 1999『史跡人吉城跡X』

瀬内明博 1992『穴藏に関する遺構群をめぐって』『関西近世考古学研究III』関西近世考古学研究会

## 報告書抄録

ふりがな	しせきたかまつじょうあとちきゅうやぐらだいはつくつちょうさかいほう							
書名	史跡高松城跡地久櫓台発掘調査概報 - 平成11~13年度調査 -							
圖書名								
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第63集							
編集者名	川畑 聰							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL 087(839)2636							
発行年月日	平成15年 3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯	東經	調査期間	調査 面積	調査 原 因
		市町村	遺跡番号					
史跡 高松 城跡	高松市玉藻 町2番1号	37201		34° 20' 47"	134° 3' 8"	H11.10.25 ～ H11.11.26 ～ H12.11.6 ～ H13.2.19 ～ H13.12.17 ～ H14.2.27	54 m <sup>2</sup>  120 m <sup>2</sup>  170 m <sup>2</sup>	史跡整備
所取遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡高松城跡	城 跡	江戸時代	地久櫓台 南土堀台 西土堀台 礎石、石敷、石列	陶磁器、瓦、 金属製品、石製品		地下室(穴藏)		

### 史跡高松城跡地久櫓台 発掘調査概報

編集・発行 高松市教育委員会  
 高松市番町一丁目8番15号  
 発 行 日 平成15年3月31日  
 印 刷 (有)中央ファイリング



地久檜台全景（上が東）



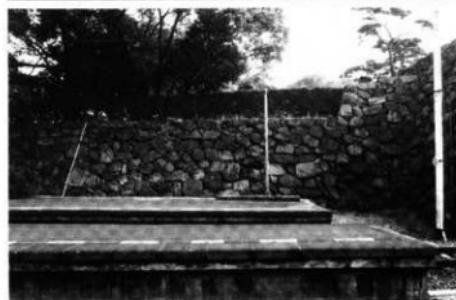
1 檻台石垣 A面（北から）



2 檻台石垣 B面（西から）



3 檻台石垣 C面（南から）



4 檻台石垣 L面（西から）



1 橋台全景（南西から）



2 橋台石垣 D面（東から）



3 橋台石垣 F面（東から）



1 檜台石垣 G面（北から）



2 檜台石垣 H面（東から）



3 檜台石垣 I面（北から）



1 檜台石垣 J面（東から）



2 檜台石垣 K面（北東から）



3 檜台石垣 M面（北から）



1 檜台地下室全景（東から）



2 地下室東壁（N面）



3 地下室南壁東側（O面）



1 地下室南壁西侧（O面）



2 地下室西壁（P面）



3 地下室北壁（Q面）



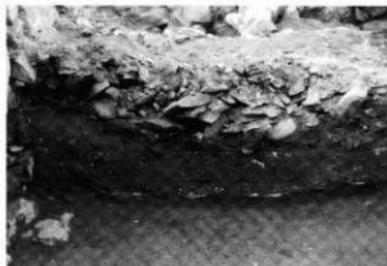
1 発掘調査前風景（南西から）



5 棚台南北断面北側②（第7～10層）



2 棚台南北断面北側（第1～6層）



6 棚台南北断面南側（第7～10層）



3 棚台南北断面南側（第1～6層）



7 棚台南北断面南側（a層, 東から）



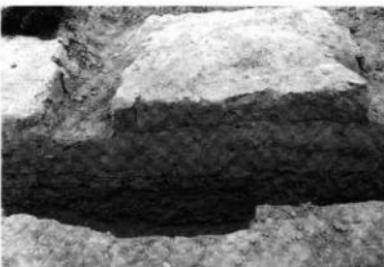
4 棚台南北断面北側①（第7～10層）



8 棚台東西断面西侧（a層, 北から）



1 檜台南北断面北側（グリ石層）



5 檜台南北断面（第 11・18・19・21 層）



2 檜台南北断面北側（グリ石層, 赤層）



6 檜台南北断面（第 20・21・26 層）



3 檜台南北断面南側（a～f 層）



7 檜台南北断面（第 23・27・28・29 層）



4 檜台南北断面南側（g～h 層）



8 檜台南北断面（第 23・32・33・34 層）



1 棚台地下室礎石配列状況（北東から）



5 西土壠台南北断面（グリ石層、東から）



2 棚台地下室北東角裏石垣（南から）



6 西土壠台南北断面（⑥～⑦層、東から）



3 西土壠台東西断面（第1層、南から）



7 西土壠台南北断面（第11～24層）



4 西土壠台（第1層除去、東から）



8 西土壠台南北断面（第32～34層）



1 南土堀台南北断面（第2～4層）



5 本丸遺構検出状況（南から）



2 南土堀台（第1～4層除去、西から）



6 本丸遺構検出状況（北から）



3 南土堀台東西断面（第5～14層）



7 本丸遺構検出状況（南から）



4 南土堀台南北断面（第5～14層）



8 本丸遺構検出状況（西から）



1 西土塹台（K面北グリ石、東から）



5 平屋建物礎石下の石組（北東から）



2 西土塹台東西断面（K面北、南東から）



6 石垣刻印（D-1, ○×）



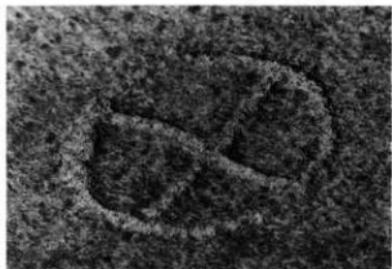
3 本丸遺構検出状況（捲台北、東から）



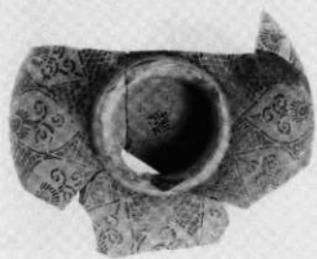
7 石垣刻印（I-18, 分銅形）



4 本丸トレンチ南壁（第3層～5層）



8 石垣刻印（B-79裏、⊗）



14



37 上



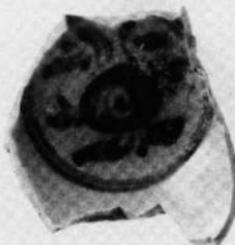
28



37



29



41



39



49



64



92



66



93



79



94



81



95



104



133



123



157



126



158



141 表



141 裏



111



112



134



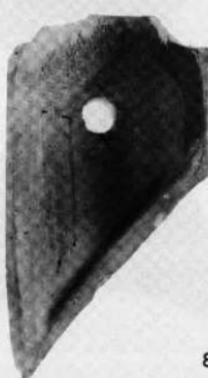
136



160



88 表



88 裏



89

